成・寿

SEIJU
2014年
第44巻
冬季

■開山忌

■第二十七回　育英会辞令交付式

黒田博志住職

本寺光真寺住職 黒田泰弘老師

開山忌並びに育英会辞令交付式

善光寺開山忌、並びに第二十七回育英会辞令交付式が平成二十六年二月七日午後二時から、釈迦殿で執り行われ、関係のご寺院、総代をはじめ檀信徒の方々が多数参列されました。

開山忌の法要は本寺の大田原市・光真寺ご住職、黒田泰弘老師を導師にお迎えし、開山楳庵白純大和尚、二世中興大圓武志大和尚のご遺徳を偲んで追善の誠を捧げました。

引き続き辞令交付式に移り、育英会理事の安藤嘉則老師が選定経過を報告しました。その中で新しく育英生に採用された中国人留学生の李子捷（り・ししょう）さん（26）について「李さんの専門は『唯識』を中心とした学問です。出身地の西安は昔の長安で、法相宗の開祖、玄奘三蔵がここからインドへ旅に出て、ナーランダ大学で唯識を学んで帰られた。その長安から

日本へ学びに来た李さんの業績はずば抜けており、今後の大成を願っています」と期待を込めて紹介されました。

黒田博志住職の導師により育英会報恩供養が営まれた後、李さんに育英会理事長の黒田住職から辞令、育英金、記念品が授与されました。

黒田住職は「開山忌は先代住職の師匠が最も大事にし、心を尽くして修めてきた行事です。今回、大変優秀な方とご縁を結ばせていただきました。育英会は師匠が海外での修行体験をもとに、多くの方々との仏縁に感謝し、そのご恩返しとして世界平和に尽くしたい、若い人たちにもこの仏縁を経験してもらいたいとの誓願を立て、設立された事業です」と育英会設立の根本にある先代住職の願いを伝え、自身も師匠の言葉を胸に刻んで日々精進しているとの心情を吐露して育英生を励ましました。

■節分追儺法会　平成二十六年二月三日

恒例の豆まきで大賑わい

「福はうち！、福はうち！」今年　年、皆さまの招福ご多幸をご祈念致しました。

好天に恵まれ、今年は友綱部屋の力士衆によるちゃんこ鍋も振舞われ賑々しい節分会となりました。

友綱部屋、魁聖（かいせい）関らによる豆まきがあり、大きな体に鬼も逃げ出しました。

ちゃんこ会場

魁聖関

転翻大般若祈祷

巳年の年男年女の方々

赤鬼さんも一緒に豆まき

熱気あふれる豆まきでした

■身代り不動明王大祭

平成26年５月28日

今年の身代り不動明王大祭は尺八と箏による奉納演奏が執り行われました。

尺八は都山流 竹琳軒大師範 遠藤千玖山先生、箏は生田流 筑紫会 飛梅司 大師範 平林歌容先生と同会師範 平林歌美緒先生。

全日本新芸書道会会長である遠藤先生は、善光寺とのご縁も古く、住職がこの大祭に塔けたお袈裟は、三十数年前遠藤先生が亡きお子様のご供養のために般若心経を墨書し善光寺に奉納されたものです。

カラー■開山忌・第二十七回育英会辞令交付式、節分追儺法会、身代わり不動明王大祭……1
法話●住職法話　平成二十六年「孝順心と行持報恩」……黒田　博志　12
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　其の八……安藤　嘉則　20
●曹洞宗教団を大きく発展させた禅師……尾崎　正善　29
法話●仏の価値観　平成二十五年「秋彼岸法会」……水庭　浩章　34
インタビュー■「共に歩む」総代さん紹介③　國廣　敏郎さん……48
アーカイブス■茶禅一味　『成寿』第三十巻（平成十一年発刊）……黒田　武志　52
カラー■やすらぎの塔開眼式・合同合祀慰霊祭、伊勢旅行、善光寺講座「論語からのお話」…67
●善光寺講座「論語からのお話」～参加者からのお便り～……73
●善光寺霊園ニュース……80
●ニュースアラカルト……96
お知らせ●参禅会、写経会、華道教室、書道教室のお知らせ、留学僧募集のお知らせ……106
●普門寺アイゼンブッフ禅センターからのお便り……中川　正壽　114
育英会寄付　120　読者のたより　122　編集後記　130

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

師父がくれた道しるべ、

『いつでも精一杯やり尽くせ。すべては生涯一度の機会だ』と叱咤する。

その師父が突然遷化され早や十年。いつなんどき誰が身に及ぶかわからない不測の事態に、私は受け入れる用意と準備のないまま、それでも頭上に成寿山善光寺を戴き、

住職として唯々無我夢中に走って来た思いが致します。
今日在るは全て支えて下さった皆さまのお陰です。ありがとうございます。

父在すときは其の志を観、父亡きあとは其の行いを観る。
三年父の道改まる無きは孝と謂うべし

この一語に啓発され救われ、「孝」にこだわり善光寺住職を預って参りました。
この十年、私は師父の喪中と心得、依然として亡き父の歩いた道に従い諸事執り行って来たつもりです。しかし師父が生涯にわたり私利私欲なく、只管に仏法のために歩まれてきた道は限りなく遥かにして、築きあげてこられた善光寺の理念は限りなく大きく、ほとほと自分の無力さ至らなさを感じながらの毎日。助けられ、支えられながらの十年間でありました。

時は流れ社会情勢も変わり、善光寺を取り巻く環境も著しく変化しております。

この変化にどう対応していくべきか。悩みますが、師父が常に時代を読み、一歩も二歩も先を行く寺作りを目指して築き上げてこられたことを胸に刻み、私に出来る事は微力でも丁寧にコツコツと積み上げてこれからも時代に即した、皆さまに喜ばれるような寺つくりを目指してまいります。

そしてその中心には『孝』を大事にした善光寺の在り方。師父の背中を追いかけ『真似僧』として歩いてきた十年。最近、『先代さまによく似てきましたね』と声をかけられます。嬉しい半面、性格や行動力までは真似出来ない自分が在ります。

生前師父は、

『博志、俺の真似はするなよ。俺は乞食からやってきたんだ。バカにされ、ホラ吹きといわれながらも歯をくいしばってやってきたんだ。お前が俺の真似をしたら必ず失敗する。だから真面目にやってゆけ。地に足をつけてやっていけば必ず寺を護って

いける。大丈夫だ。』

ことあるごと言われました。私はとうてい師父の真似は出来ません。当然、あの存在感には到りません。でも外見や性格を真似するのではなく、私はその理念を真似していく。もしかしたら師父のやり方とは正反対をするかも知れませんが、私は、師父の理念がそこにあると信じ寺を護っていくのみ。

無私の心、私利私欲なく歩まれた師父の生き方をこれからも真似して善光寺を護って参る所存です。

住職になり十年を迎える区切りに改めて原点回帰、脚下照顧。

さらに十年、師父大圓武志大和尚を敬い慎み、道に従い精進して参ります。

みなさま方の益々のご教導何卒よろしくお願い申し上げます。

■平成二十六年　盂蘭盆施食会法話

孝順心と行持報恩

善光寺住職　黒田博志

前回は、『盂蘭盆経』より目連尊者が父母のご恩に報いるため餓鬼道に堕ちて苦しむ母を救済せんとした故事に因んでお話申し上げました。今回は万人共通、親をもつ子の立場から「孝順心と行持報恩」について、二つの仏事供養を申し述べたいと思います。

ひとつは先祖供養。最も身近な方への報恩供養です。ご先祖さまや兄弟縁者に対するいわゆる縦の系統への供養です。

いまひとつはありとあらゆる御霊に対する供養です。これは施食供養と申します。たとえ直接的ご縁でなくとも、間接的ご縁をいただいていた方々、目に見えないけれども諸々恩人に対して、さらに、生きとし生けるものすべての御霊に対してのご供養。これは横の系統の供養となります。

最近、新聞紙上に皆さまご承知の北海道での吹雪の中悲しくも美しい親子の愛と絆の事故に関連した記事がありました。ここに紹介します。

《記事の抜粋》

作家、故麻生路郎氏の章句に、『昔とは父母

のいませし頃を云い』

長命の両親に恵まれ、いつまでも「昔」を顧みずにいられる人は幸せである。母親を病気で亡くし、ときに小学三年生の少女は漁師の父親と二人暮らしをしていた。北海道湧別町で激しい吹雪のなか、進路を絶たれ動けなくなった親と子、父親は娘をかばい、覆いかぶさるように抱いて一夜を過ごした。翌朝発見されたとき抱かれた娘は助かり、父親は自らの命とひきかえに死亡した。やがて回復した娘さんから『応援してくれた全国の皆さまへ』と本紙に託したお礼の手紙を読んだ。いまは同じ町内の親戚の家で暮らしている。――わたしは今とても元気です。学校では理科と図工が好き。漢字の練習が好き、また時折連れていってもらう温泉が好き。――十歳の胸に抱く「昔」は、それでもやはり重たいのだろう。ベッドで、父の優しい顔が浮かんできて涙が出て止まらないこともあるとい

う。そのように手紙は結ばれている。また夏音ちゃんは、お父さんが遠くから安心して見守ってくれるよう、人を想える大人になれるようがんばりますと。きっと天国のお父さんは目を細めて泣いていることだろう。

さて私が大事に思う経典に『父母恩重経』というお経がございます。

そこには「父母の大恩重きこと天の極まり無きが如し」という徳目があります。文字通りお父さんお母さんから頂いた恩はきわまりなく重たいものであると教えています。当り前のことですが、それが当り前にいかないから諭しているのです。

親の存命中はその重さや敬いの心をもつことはとても出来ないことです。親からいただいている恩は気づかないことだらけです。お父さんお母さんが子のためにすることが当たり前と感じてしまっているのです。だから気付く事ができません。親はわれ省みず唯々、子を愛し子の無事を念じているからですよね。

私も人の親になってまだ一年半です。こんなにも一人の子を育てることが大変なことだったのかと感じております。

生まれて間もないとき毎晩夜泣きがあり、なんで泣いているかも分からず、ひたすらに抱っこをし、あやし続けても泣き止まず、途方にくれてしまいました。いつまでも泣き続け、その迫力と飽くなきパワーに感心させられたり、親の立場はほんとうに大変なんだと漸くわかりかけています。

翻って私も親の子、やはり同じであったのかと省みながら子どもの無邪気な笑顔に救われつつ毎日成長させていただきたいと感じております。

この経典には父母に頂いた、ご恩にどのように感謝し行持報恩すればいいのか順々と教えてございます。

十ヶ条のご恩を示しています。

一、懐胎守護（かいたいしゅご）の恩、十月十日母はお腹の子を思い、身も心もくだいてお守りくださる恩。

一、臨産受苦（りんさんじゅく）の恩、母は子を出産の時、陣痛の苦しみに耐え忍び、わが子をお守りくださる恩。

一、生子忘憂（しょうしぼうゆう）の恩、出産し赤子の顔を見るときは心身の苦しみを忘れ、お喜びくださる恩。

一、乳哺養育（にゅうほよういく）の恩、自らの血液、母乳を与え、養育してくださる恩。

一、廻乾就湿（えけんじゅしつ）の恩、母は汚れた所に寝て、乾いた所へ我が子を寝かせてくださる恩。

一、洗濯不浄（せんかんふじょう）の恩、子が排泄した不浄物を、洗い浄めてくださる恩。

一、嚥苦吐甘（えんくとかん）の恩、自らは粗衣粗食に甘んじ、子には美味な食物をくださる恩。

一、為造悪業（いぞうあくごう）の恩、子に代わりたとえ地獄におちても子の幸せだけを念じてくださる恩。

一、遠行憶念（おんぎょうおくねん）の恩、親を離れて子が旅をするとき、我が子の無事を念じてくださる恩。

一、究竟憐愍（くぎょうれんみん）の恩、父母はただひらすら我が身に代えて子を守り死んでもなお、後々までお守りくださる恩。

このように多くのご恩を示してございます。

今、私はありがたいことにこうして生かさせ

て頂いております。

かりそめにも自分の力で生きていると思ってはいけないのです。また、人間いつ不測の事態にならぬとも限りません。思いがけぬはいのちの存在。このお経は有難きいまの存在にそのひとつひとつ教え諭し気づかせてくれます。

私も父を失ってよりありがたさと尊さと父の存在の大きさを痛いほど感じています。さらに子が親の恩に報いるにはどのようにしたらよいかが『父母恩重経』には示してあります。

「父母のこの世にいます時にこそ、真心こめて安心しよろこんでいただけるようつくすべし、不慮にして父母なきときひたすらに追善供養おこたらず、生けるが如く仕へ奉りこの心もて、あまねく人を救はんと、慈悲のいとなみ励むべし。およそこれらを以って父母の恩に報ずとなす。」とあります。

教えに従い皆さまと私、いまここに坐することまこと、感謝報恩追善の供養となっているのでございます。

「孝順心」という教えがございます。

かつて永平寺を開かれた道元禅師さまの一番弟子に懐奘（えじょう）さまという和尚さまがおられました。懐奘さまは道元禅師さまがお亡くなりになられた後も、ご身命尽しご生前中と変わらず、あたかもそこにいますが如くにお仕えされたそうです。

永平寺では道元禅師さまがお亡くなりになられて七五〇年になりますが、今も変わることなく、懐奘さまが道元禅師さまにお仕えしたように日々刻々行じております。

どのように行じているかと申しますと、朝は三時半起床。担当の和尚さんはそれより先に三時より道元禅師さまのお部屋とお像をお清めし、お清めのときご身体の部分によってタオルを替えます。お清めが終わりますと、お像の前にご霊膳、抹茶、蜜湯（砂糖湯）をお供えし感謝報恩の誠を尽します。この勤めは、朝・昼・夕と三百六十五日絶えることはありません。そして、夜八時には、お休みの挨拶とお拝を行っています。

これこそ「孝順心」です。孝を尽しても尽しても、なお足りぬ素直な心を尽しきる。これが道だと教えていただきます。これより先も変わることはありません。この在り方と心が仏の道なのでございます。

永平寺において道元さま祖師さま。各寺において歴代住職さま。家にあっては父母先祖さまです。そしてその先にはお釈迦さまに続く道があるのです。

お盆は大事なご先祖さま、或いは父母、縁者さまとともにお過ごしする一大行事です。身辺

のお掃除をしてお清めし、心もきれいにしてお迎えいたしましょう。家族みんなでお迎えいたしましょう。そしてご先祖さまにお心いたしてどのようにお迎えし、どのように過ごし、どのようにお見送りをしたら最善なのか皆さまで考えましょう。ご先祖さまも帰ってきてよかったとお思いいただくお盆に致しましょう。

ご清聴ありがとうございました。

義燈壁画
より

〈連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その八

駒沢女子大学教授　安藤嘉則

〈本文　書き下し文〉

尋常、坐処には厚く坐物を敷き、上に蒲団を用う。あるいは結跏趺坐、あるいは半跏趺坐。いわく、結跏趺坐は、まず、右の足をもって左の腿の上に安じ、左の足を、右の腿の上に安ず。半跏趺坐は、ただ、左の足をもって、右の腿を圧すなり。

〈現代語訳〉

通常、坐禅する場所には厚く敷物を敷き、その上に布団を用いる。坐り方は結跏趺坐、あるいは半跏趺坐である。結跏趺坐とは、まず右足首の部分を左腿に当て、左足首の部分を右腿の上に置くのである。半跏趺坐は、左足首の部分を右腿の上にのせるだけである。

『普勧坐禅儀』では、冒頭仏道修行においてなぜ坐禅をしなければならないのかということを説き示した上で、坐禅の具体的な坐り方が説明されています。

まず「坐処には厚く坐物を敷き」とあるのですが、このうち「坐物」とは座褥あるいは座布

団のようなものを指します。坐禅で足を組むとき、膝が床に当たりますが、床張りのような場所ですと痛いので、こうした敷物がクッションとしての役割を果たし、安楽に坐ることができるのです。

そもそも禅宗成立以前の仏教では瞑想・禅定の実践において「樹下石上」で坐るということが多くありました。タイ・アユタヤのマヘヨン寺に参拝した折、池の畔や樹下で修行僧たちがそれぞれ瞑想している光景をみかけました。また中国では石上で坐禅する禅者の事例や鳥窠道林のように木の上で坐禅をするといった事例があります。また日本の禅宗寺院でもその寺のご開山様が修行されたと伝えられる坐禅石がよく置かれています。

こうした樹下石上の屋外での坐禅では、やはり足への負担ということが問題となってきます。この『普勧坐禅儀』ではあくまで坐禅堂での坐禅であり、できるだけ足への負担を減らす配慮は必要であることが説かれていたのです。

現在は南方仏教や東アジアの仏教寺院では瞑想修行は基本的には屋内の施設で行われています。たとえばタイの瞑想センターとしてよく知られ、世界各地から修行者を集めているワット・パクナム寺院では室内の瞑想室が完備されており、出家者ばかりでなく在家の人々も大勢坐っている様子を見学したことがあります。このワット・パクナム寺院は横浜善光寺と関係が深く、育英会の事業の一環としてこれまで何人もの日本人修行僧がこの寺院に派遣されています。また、ワット・パクナム寺院側も副住職ら一行が善光寺に表敬訪問のため来山するなど、現在も育英会事業を通じて両寺の交流が続けられています。

ところで現在の曹洞宗の坐禅ではこの『普勧坐禅儀』でいうような「厚く敷物を敷き」とい

うことは基本的に行われていません。というのも日本では近世以降になると室内空間が板の間から畳へと変化しています。そこで日本の坐禅堂も単（修行僧の坐禅する場所）に畳が敷かれるようになり、この「敷物」が必要がなくなったのです。

さて『普勧坐禅儀』では続いて「上に蒲団を用う」とありますが、「蒲団」とは坐禅中に姿勢を保つためにおしりに当てるものであり、現在は座蒲という丸いクッションのようなものが用いられます。「蒲団」というと現在の日本人は寝具としての「蒲団」（あるいは「布団」）を思い浮かべてしまいます。田山花袋の私小説『蒲団』はいうまでもなく寝具としての「布団」です。しかし「蒲団」という語は中国語（漢語）では寝具としての意味はなかったようです。この問題については森岡貴志氏による「「蒲団」の研究―漢語の「蒲団」と寝具の「蒲団」―」（茨城大学の真柳誠先生（中国科学史）の研究室のHPに掲載されています）という大変興味深い論稿があります。そこで森岡氏の研究に基づいてこの「蒲団」について述べてみたいと思います。

まず、この「蒲団」という言葉は現在の中国語でも用いられており、中国語辞典を引きますと、『中日辞典』では「（僧侶が用いる）ガマの葉または麦わらで編んだやや大型の座布団、円座。日本の蒲団は鋪蓋、被褥などと言う。」とあります。また『中日大字典』では「僧侶が座禅、あるいは法事の時、座るのに用いる蒲、または麦わらで編んだ円座。ふとん。」とあります。つまり現在に至るまでも中国では基本的には僧侶の坐具として用いられていて、日本のいわゆる布団（蒲団）は中国人は別の言い方（鋪蓋、被褥）をしていることがわかります。

中国で「蒲団」という漢語が用いられるのは

唐の時代からです。たとえば『全唐詩』の中に「蒲団」を含む漢詩は一五を数えますが、いずれも僧侶の坐具として用いられています。そしてこの「蒲団」という言葉は平安時代初期の八五〇年頃には日本に伝来しており、天理大学本『金剛般若経集験記』平安初期の傍記に「蒲団」の用例があることが指摘されていますが、ここでは「ワラフタ」という訓が当てられています。実は現在のように「フトン」というようになったのは、鎌倉時代からであり、この道元禅師の『普勧坐禅儀』や『正法眼蔵』「坐禅儀」などで宋代の中国音として「フトン」という発音が取り入れられた可能性が高いようです。

現在の曹洞宗の坐禅で用いている座蒲は、ビロードや綿布で包まれた丸い形をしており、中身は蒲（ガマ）の代わりに、綿・そば殻・パンヤが入っていますが、基本的に中国の「蒲団」の伝統、つまり蒲（ガマ）で編んだ円座を受け継いでいることがわかります。なお臨済宗の僧堂で坐禅する場合、このような丸い座蒲は用いられていません。「単蒲団」といっていわゆる四角い座布団を二つ折りにして坐禅しています。

いずれにしても私たちが普段、「フトン（布団・蒲団）を敷く」とか「ザブトン（座布団）を当ててください」と何気なく発音しているのも、鎌倉時代に宋代の「フトン」という発音を伝えた禅僧の影響なのです。

次に一番大切な坐禅の坐り方ですが、結跏趺坐（けっかふざ）、あるいは半跏趺坐（はんかふざ）という二つの坐り方が示されています。

結跏趺坐とは、まず右足首の部分を左腿に当て、左足首の部分をその右足の腿の上に置く坐り方です。これは誰もができる坐り方でありません。私は大学生たちに授業で坐禅指導をするのですが、一斉にこの坐法をさせてみせます。

しかし実際にできる学生は半分もいません。右の足首を左腿にのせるまではいいのですが、左足を右腿にのせるとなるときが大変です。ここでギブアップする人も多いのですが、痛みをこらえて無理矢理することもよくありません。無理矢理の結跏趺坐は五分ともちません。こればかりは少しずつ慣れていく必要があります。

この結跏趺坐の一番よいところは、両膝がしっかり畳の部分に当たり、おしりとの三点で押さえることができるという点です。ここがもう一つの坐り方である半跏趺坐と少し異なる点です。半跏趺坐は左の足首を右の太もものところへ持って行くだけですが、そうすると左膝が畳から少し浮き上がる傾向があります。結跏趺坐をしますと、両足が完全にブロックしてしまう感じで下半身が微動だにしない感覚がもたらされます。

これはちょうど三脚の構造に似ています。たとえば椅子を例にとると、大抵の椅子は四本脚ですが、これはこの四本の脚はぐらつかないように四本脚の長さがきちんと調整されているから安定しているのです。しかし四本のうちのたった一本がうっかり五ミリ短くなっていたら、その五ミリ分の誤差によってわずかですがガタガタします。つまりきちんと作ってあれば問題ないのですが、誤差がでるとその誤差が不安定さをもたらすのです。しかし三脚はいかがでしょうか？　三脚は三本の脚がたとえば四五センチ・四〇センチ・五〇センチとすべて異なっていても一ミリもぐらつきません。そうでなければいい写真はとれません。ちょうどこの三脚のように座蒲にどっかり腰を据え、両膝で畳をしっかり押さえて、その三点から背骨を垂直に立てていくと、自然と微動だにしない感覚を得ることができます。

この坐り方はヨガ（ヨーガ）ではパドマアー

サナといいます。パドマとは蓮華、アーサナは坐法という意味で「蓮華座」と訳されます。これは右足と左の足が交差してちょうど蓮華の花が咲いているようにみえるからともいわれるのですが、いずれにしても下半身を安定させて瞑想するインドの伝統的坐法です。

この結跏趺坐に関しては、般若経の注釈書であり、大乗仏教の理論書として重要な『大智度論』では次のような記述があります。

諸の坐法中、結跏趺坐、最も安穏にして、疲極せず。此れは是れ、坐禅人の坐法なり。手足を摂持すれば、心も亦た散ぜず。又た一切の四種の身儀の中に於いて、最も安穏なり。此れは是れ禅坐にして道を取る法坐なり。魔王、之を見て、其の心に憂怖す。是の如き坐は、出家人の法なり。林樹の下に在りて結跏趺坐すれば、衆人は之を見て皆な大いに歓喜し、此の道人は必ず道を取るべしと知る、

つまり結跏趺坐は安穏にして疲れることがなく、悟りに導く坐法であり、この姿を見て魔王も恐れ、人々は歓喜するとあります。つまり結跏趺坐で坐禅する姿そのものの功徳がここで述べられていますが、このような記述を読みますと本連載の第六回目（『成寿』第四十二巻）に紹介した澤木興道老師の逸話が思い出されます。

すなわち澤木老師が熊本の宗心寺（天草市）で小僧として修行されていた頃、「小僧、小僧」と呼び捨てにしていた近所のおばあさんが誰もいない本堂で坐禅をしていた若き澤木老師を合掌して拝みだしたことから、坐禅には不思議な功徳があるのだということに気づいたというエピソードです。

確かに結跏趺坐をして坐禅をする修行僧の姿は、なにやら不思議な重みをもって見えます。

ただこれはあくまで外見のことであり、身体の姿勢であって心の中身のことでありません。しかし、この身体の姿勢が心のあり方とまったく関係ないかというとそうではないはずです。永平寺管首で宮崎奕保禅師がよくおっしゃっておられていた言葉があります。

坐禅ということはまっすぐということや。まっすぐというのは背骨をまっすぐ、首筋をまっすぐ、右にも傾かない、左にも傾かない。まっすぐということは正直ということや。身心は一如やから体をまっすぐにしたら心もまっすぐになっとる。

（ＮＨＫスペシャル「永平寺・一〇四歳の禅師」における言葉より）

これは駒沢学園に来られたときにも学生に語りかけられていたことを思い出します。体を調えること（調身）で、心を調える（調心）というのが坐禅の実践の基本であり、その鍵となるのは呼吸を整えること（調息）となります。

ただ現実にはさまざまな事情で結跏趺坐ができない方もいます。そういう場合半跏趺坐の坐り方で坐る方も多いのですが、場合によっては半跏趺坐で坐る方が心を調えやすいということも事実としてあります。またある方は椅子坐禅で坐られる方もいます。

かつてカリフォルニアのマウンテンセンターという山寺の道場（陽光寺）で前角博雄老師（善光寺先住の黒田武志老師の実兄）の下で摂心会に参じたとき、期間中修行僧に混じって老年の居士が椅子を堂内に入れて堂々と坐っておられました。日本の僧堂では見たことのない光景でしたが、私はそのご老人の一生懸命坐っている姿にとても感銘を受け、今でもそのお姿を思い出すことができます。椅子坐禅の功徳ともいうべきものでしょうか。

（続）

◇曹洞宗大本山總持寺二祖峨山韶碩禅師六五〇回大遠忌について

曹洞宗は福井県越前の永平寺と横浜市鶴見区の總持寺が両本山となります。永平寺では、道元禅師が御開山様、その法を継いだ懐奘禅師が二祖となります。總持寺では、瑩山禅師が御開山様、その法を継いだ峨山禅師が二祖となります。宗門ではこの四名の祖師方の遠忌（回忌）供養を大遠忌とし、五十年ごとに大法要を厳修しております。

平成十四年には永平寺で道元禅師の七五〇大遠忌が執り行われました。善光寺でも先代住職が、焼香師として永平寺法堂にて導師を勤め報恩のご供養をされた事は『成寿』三十四巻にご報告の通りです。来年は、大本山總持寺、二祖峨山韶碩禅師の六五〇回大遠忌となります。大本山總持寺では、平成三十六年の瑩山禅師の七〇〇回大遠忌と併せテーマを「相承～大いなる足音が聞こえますか～」とし、様々な記念事業や諸堂の整備が執り行われております。善光寺からも皆様の尊い浄財より懇志を寄せさせて頂きました。

此の機会に大本山總持寺に参拝し、脈々と仏法を繋いでこられた祖師がたに感謝の念を申し上げ、檀信徒皆さま各家のご先祖さま、そして善光寺先代住職黒田武志大和尚に報恩の誠を捧げたく参拝を企画しております。

予定日は、平成二十七年九月二十九日（火）です。詳細については改めて通知申し上げます。

どうぞ、皆さまご一緒に参拝致しましょう。

曹洞宗教団を大きく発展させた禅師

徳善寺住職　尾崎正善

峨山禅師とは

来年、平成二十七年、總持寺二祖、峨山韶碩禅師（一二七六～一三六六）の六五〇回大遠忌が執り行われます。それに因んで、道元禅師から瑩山禅師、そして峨山禅師へと相承された教えと曹洞宗の展開について述べたいと思います。

まず、峨山禅師という御名前は、余り聞いたことがないかと思われます。曹洞宗では、中国から正伝の仏法、禅の教えを伝え、永平寺を開かれた道元禅師と、總持寺を開き曹洞宗が全国に展開する基を築かれた瑩山禅師のお二人を、「両祖」として顕彰しています。

それぞれのお弟子に、永平寺二世としてその護持に務められた懐奘禅師、總持寺二世として曹洞宗教団の発展を大きく進められた峨山禅師がおられるのです。

峨山禅師の業績は、瑩山禅師のお弟子として總持寺の護持発展に尽くし、多くの弟子を育て、その弟子達が全国に曹洞宗を広めるように指導をされたのです。

鎌倉新仏教と呼ばれる各宗の祖師は、強い宗

派意識や教団を作る意識は、低かったと言われています。各宗の歴史を見ると、教団としての基盤を固め、全国展開に努めたのは、「中興の祖」と呼ばれる方です。曹洞宗でそうした位置に居られるのが、峨山禅師なのです。

峨山禅師の御生涯

さて、峨山禅師は、建治二年（一二七六）、現在の石川県河北郡津幡町に生まれました。

十六歳の正応四年（一二九一）、叡山に登り修行を行いました。このように叡山で学んだのは、道元禅師・瑩山禅師を始め鎌倉諸宗の祖と同じです。

二十二歳の冬、瑩山禅師に京都で相見しました。両者は親しく問答を行ったのですが、峨山禅師は瑩山禅師の真意を悟ることができませんでした。縁かなわず別れたのです。

それから二年後の正安元年（一二九九）春、再び金沢の大乗寺に瑩山禅師を訪ね、衣を改め曹洞宗に入門しました。そして、二年の修行を経た二十六歳の十二月二十三日、悟りを開き、瑩山禅師の印可を受けたのでした。その後、徳治元年（一三〇六）三十一歳で、瑩山禅師の命により、諸法遍歴の途に着きます。

元亨元年（一三二一）七月二十二日、瑩山禅師は、定賢律師より諸嶽寺観音堂を寄進されました。寺の名を諸嶽山總持寺と改め、造営に着手したのですが、峨山禅師は、師の側らにあってその補佐に務められました。三年後の正中元年（一三二四）五月二十九日、總持寺の僧堂開単式を行い、七月七日に峨山禅師は、瑩山禅師より總持寺住職を譲られました。

これより以後、貞治五年（一三六六）に九十一歳で亡くなるまでの四十二年の長きにわたり、總持寺の護持発展、弟子の育成に尽力したのでした。

總持寺　大祖堂（右）と佛殿（左）

峨山禅師の弟子達

峨山禅師は、晩年に弟子を記録した『嗣法次第』を書かれました。その中には、二十八名の主要な弟子が記されています。さらにその中、十一名の弟子が二十五もの寺院を開いています。その地域は、北は東北・岩手、南は九州・鹿児島まで広範囲にわたります。石川・富山・福井という北陸地域が多いのは事実ですが、曹洞宗が全国展開する基礎を築いたことは間違いありません。さらに孫弟子の代まで含め、その活動の実際を示したならば、とても語り尽くせません。

さて、このような多くの弟子は、ただ待っていれば集まって来るというものではありません。また、集まった弟子達に対して、それぞれの能力に合わせた細やかな指導も必要だったでしょう。峨山禅師の名声と共に、その指導力が高かったことが想像できます。

瑩山禅師が、衆生済度・女人救済の誓願を立てられたことは、『洞谷記』という書物に記録されています。こうした思い、坐禅を修行の基とし自己を研鑽し、さらにその修行力を人々のために振り向け実践することが、峨山禅師へと受け継がれたのでした。それは、授戒会や祈祷儀礼、葬祭儀礼等に現れています。そして、その教えはさらに、弟子達へと受け継がれ、全国に伝えられたのでした。

峨山禅師の功績

峨山禅師の足跡を顕彰するならば、第一に挙げるべきは、弟子の育成、指導という点です。禅師は、「二十五哲」と呼ばれる多くの弟子を育てました。これは、曹洞宗の歴史の中でも特筆すべき人数です。特に日本曹洞宗教団初期の段階では、最初の禅者といえます。

さらに、多くの弟子達が、広く全国に赴いた結果、現在の曹洞宗寺院の多くが、峨山禅師の弟子・孫弟子、さらにそれに連なる系統によって開創されているのです。

第二点は、その門弟が協力して總持寺を維持・発展させるため、住職を一定期間で交代させる「輪住制」を確立したことです。そうした住職交代制度は、協力して寺院を守って行くと共に、多くの優秀な人材を生み出す原動力となったのです。

さらに、その法孫の拠点寺院においても輪住制が採用されました。例えば、神奈川県南足柄市の大雄山最乗寺がそうでした。こうした寺院がそれぞれの地域の要となり、弟子を育て、さらに新寺を建立し、民衆の接化に努めた結果が、現在の曹洞宗を形作っているのです。

三点目は、時代に則した教化・布教ということです。坐禅修行を根幹に弟子達に正伝の仏法を説き示しましたが、同時に多くの人々にも仏

法を広められました。その具体的な例として、總持寺に入られた直後に授戒会を行っています。授戒会は、仏戒を授かる法要です。これは、仏さまとのご縁を結ぶ重要な意味を持っています。日頃、生活に追われる庶民にとって、修行を実践することは至難です。そうした中、授戒を通して仏法に触れ、後生への結縁を得ることは、多くの人々の救いへと繋がったのです。

大般若転読の法要も總持寺で始めています。これは祈祷儀礼ですが、總持寺の安寧を願うと同時に、人々の不安を除き、願い叶えることを祈念したのです。

現在の曹洞宗の衆生済度の姿勢は、峨山禅師の思いを受け継いだものといえます。

このように峨山禅師は、七百年近くも前に「人材育成」「教団の運営」「布教教化」に深い想いを持ち、それを実践し多くの人々を導いたのでした。

■平成二十五年　秋彼岸会法話

仏の価値観

長泉寺住職　水庭浩章

昨年、「価値」についてのお話をいたしましたが、憶えていらっしゃいますでしょうか。

私が今、実際に身に付けているお袈裟、これは私にとってはものすごく価値のあるものです。私にとって、この布のつなぎ合わせたものは仏さまそのものであり、直接地面に置くことなどできません。それほど尊いものです。

でも、皆様にとっては必要としないものですよね。貰っても使い道がないと思います。

逆に、多くの方がお召しになっているワイシャツやネクタイ。なかにはそれがなければお仕事にならないという方もいらっしゃると思います。しかし、私はそれを必要とはしません。

これはほんの一例ですが、人それぞれの仕事や趣味によって、必要と感じるものが違ってきます。人の価値観はそれぞれなのです。

私たち人間は、それぞれの価値観を基準にして、好きとか嫌いとか、善いとか悪いとかを判断しています。

しかし、人によって価値観は違うし、時代やその時の精神状態によっても変わってきます。それゆえに、人は迷い、悩み、時に他人を傷つ

けてしまうこともあるのです。

では、私たちは何を基準に、どこを拠り所にして生きていけばいいのか……。

その答えが、仏教にあります。それは、お釈迦様のお悟りです。どんなに時代が変わっても決してぶれない、絶対に変わらないものです。

『我と大地有情と同時に成道す』

お釈迦さまがお悟りをひらかれたときに云われたと伝えられているお言葉です。

「我」とは、お釈迦さまお一人を示すものではなく、命の源を示しています。すべてがここから生まれてきます。当然、お釈迦さまも命の源から生まれてきたわけです。私たちも同様です。「大地有情」とは、この世のありとあらゆる存在のことです。

「同時に」というのは、いつでもの意味で、「成

道」とは、道を成す。つまり、お悟りのことです。

「私たちを含む、この世のありとあらゆる存在のすべては、いつでもそこに尊い存在として道を成している。いつでもそこに、過不足なく備わっている。」ということです。

人は皆、平等に尊い存在である。絶対に平等である。決してあの人よりはこの人の方が上だと比べられるものではありません。

人に限らず、天地いっぱいのいのちが、決して比べることなどできない絶対平等な存在なのです。

そのことを踏まえたうえで、謙虚に、自分のいのちを支えてくださるすべての存在に感謝して、自分を創りだしているすべてのものを全身心で感じて、あらゆるものを尊び、自分自身を尊ぶこと。

人に喜びを与えることを我が喜びとし、むやみに怒りをあらわさず、他人を認め、自分自身を認めること。

姿形が変わるわけではありません。そこにある景色が変わるわけではありません。だけど、自分自身の心が、目に見える世界が、本当の意味での安らぎを得ることができる。

あなたはあなたでいい。あなたはあなたで唯一無二、尊い存在なのだから。

大筋だけですが、そのようなお話を昨年いたしました。

「価値」という事の専門的なことは、私は倫理学や経済学の勉強をしておりませんので、深いお話はできません。しかし、仏の価値観については自信をもって云えます。

「価値」という字を、広辞苑で調べてみますと、『物事の役に立つ性質』経済学では『商品は使用価値と交換価値とを持つとされる。』とあり

ます。

物事の役に立つ性質。例えば時計。この時計が動いているから時間がわかるわけです。今日も私に与えられている時間は四十分だと方丈から厳しく言われています。ですから、いま時計は私にとってはとても役に立つものです。

しかし、もし時計が止まっていたら、全く価値のないものになってしまいます。

次に、「使用価値」とは、肉体的に、或いは精神的に欲求を満たすもの、それぞれの趣味などは「使用価値」です。例えば「お酒を飲めば、嫌なことを忘れられる。」そのような人にとってみれば酒代はとても使用価値があるものです。

「交換価値」とは、例えば「この水を一万円で売りますよ」と言ったら、だれも買いませんよね。

この水の価値は、金額にすると百数十円である。そのことに納得した人が買い求めるということです。

しかし、もし深刻な水不足になり、全く水が手に入らない。水がなければ生きてゆけないという状況になれば、一万円出してでも買い求める人は多く出てくると思います。これが、「交換価値」の一例です。

このように、「価値」というのは、人やその時の状況によって変わってしまうものです。水の話にしても、私は、水の豊富な、美味しい清水が湧き出しているようなところで生まれ育ちましたから、いまだにお金を出してお水を買うということに抵抗があります。逆に、高いお金を払ってでも、安全でおいしい水を求めるという人もいます。それが、それぞれの価値観ということです。

先日、インターネットで調べ物をしているときに、たまたま「あなたの値段を鑑定します」というページを見つけ驚きました。

内容を見てみますと、二十二の問題に対して順に回答をしていき、その結果をもとに値段を決め、順位を付けるというものです。

因みに、一位の人が二億三五八九万四四七九円で、ワースト一位の人は、ふざけて回答したのかもしれませんが〇円でした。

果たして、二十二の質問でどの程度人のことが分かるのか。興味本位で私も答えてみたのですが、その質問内容に気分が悪くなってやめてしまいました。

そもそも人に値段なんか付けることができるのでしょうか。人が人の価値を測れるものなのでしょうか。

それぞれに価値観はありますから、その価値観の合う合わないで様々な選択をしていくことはよくあります。

会社の面接や、配偶者を選ぶときにはとても大切なことですね。

しかし、それはあくまで会社に合う合わない、自分に合う合わないを決めるだけのことであって、その人の価値を決められるものではありません。

何をもって価値があるというのか……。給料が高ければ価値があるのか…。みんながうらやむような仕事に就くことが価値があるのか……。

それは違いますよね。

私の知り合いの、あるお方のお話をいたします。

そのお方は、ここではTさんとおよびいたします。Tさんとは、趣味の野球を通じて知り合い、年は私よりも一回り上ですが、たいへん親しくお付き合いさせて頂いております。

Tさんのお仕事は、ゴミ収集業です。家庭から出たゴミ、或いは、飲食店などの業者から出たゴミを集め、焼却所まで運んでいきます。

ゴミ収集に関しては自治体によって違いはありますが、Tさんの地域では、日曜日と祝日にはゴミ収集が出来ないことになっています。ですから、連休の後には大変なゴミの量になります。

ある年のゴールデンウィーク明け、Tさんから「明日、明後日と大変だから、もし手が空いていたら手伝ってくれないか」と頼まれましたので、私はお手伝いをすることにしました。

この年のゴールデンウィークは四連休があり、その間のゴミが連休明けにドバッと出されます。

ごみ収集の仕事は、想像以上にたいへんな仕事でした。朝、六時半に出発して契約業者を回ります。ようやく契約業者のゴミの回収を終えると、今度は一般家庭ゴミの回収に回ります。連休明けのゴミ集積所は、予想通りゴミの山となっていました。

そのゴミを収集車の後部に、持っては投げ入

れ持っては投げ入れの繰り返しで、すべて入れ終わると少し先の集積所に行き、同じ作業の繰り返しです。時間の経った生ゴミは、水を含んで非常に重いんです。体力には自信があったのですが、少し回っただけでヘトヘトになってしまいました。

沢山のゴミが出されていますので、すぐに収集車は一杯になってしまいます。すると、そのゴミを焼却所まで運んで行きます。焼却所は人里はなれた山の中腹にありましたので、往復だけでもかなりの時間がかかります。それを、十回以上繰り返したでしょうか……。その道中、Tさんといろいろな話をしました。

そして、Tさんがこの仕事を始めたキッカケをお聞きしました。

「最初は社員募集の広告を見て、給料も良かったので始めたんだ。そして、やっているうちに町を綺麗にしていることにものすごくやりがいを感じて、しかも、あまり人気のない仕事だろ。これはいいビジネスチャンスだと思ってな。約五年、務めたあとに、仲間を誘って独立しようとしたんだ。

ところが、もうすぐ会社を興そうというときに、仲間から『ごめん、一緒に出来ない』って言われてなあ、『何でだよ』と聞いてもちゃんと答えないんだよ。しつこく聞いたらようやく答えたんだ。その答えがショックでなぁ……」

実は、Tさんのお仲間のお母さんが、大反対をしていたという事でした。

そのお母さんは、「地元でそんな仕事をするなんて、絶対に許しません。私はあんたをゴミ屋にするために育ててきたのではありません。もし、どうしても、その仕事をするというのなら親子の縁を切るよ」と、すごい剣幕で言われたそうです。そして、そのお仲間は止む無くお断りをしたのだそうです。

「俺はその話を聞いたときには悔しくて悔しくて……、自分はこの町を綺麗にしているんだと誇りをもってやってきたのに、悔しすぎて涙が出てきたよ」

そんな辛い思いをしたのですが、Tさんは、その後独立して、誇りを持って仕事をしています。そんなTさんを慕って、若い社員も二人入りました。「いまでもたまに汚い仕事と言われることはあるよ。でも、誰かがやらなければ困るでしょ。俺たちは誇りをもって仕事をしているんだ。人にどう評価されようと、そんなことは気にしないよ。」そう言うTさんの顔は輝いて見えました。

私たちは、無意識に日常を送ってしまいがちですが、本当に多くの人のお陰様で生かさせて頂いております。着ているものにしても、食べているものにしても、すべて自分ひとりでは出来ないでしょう。

お互いがお互い、それぞれの分野で務めて、お互い知らず知らずのうちに助け合いながら生きているのです。どっちが上でどっちが下ということはありません。お互いが平等に尊いのです。

それなのに、何故人間は必要以上に比べ評価をするのでしょうか……。何故、見た目や職業で判断をするのでしょうか。

自分の価値を高めるということは大切な事だと思います。一生懸命に勉強して、難関と云われている大学に入学し、就職を有利にする。地道に実績を積み重ね、会社のなかで出世をする。その行為も自分の価値を高めるということになります。

私自身も、僧侶としての自分の価値を気にしながら生きています。そのことが悪いとは思いません。

しかし、それぞれの価値観をすべての人に当

てはめて判断することがいけないことなのです。

Tさんのお仲間のお母さんは、自分の息子がごみ収集の仕事をするに値しないと、自分の価値観を息子に押し付けてしまいました。自分がだしているゴミを集めてくださり、自分の住んでいる街をきれいにしてくれている。世のため人のために働いているTさんの仕事の本質を見ようともせず、偏った眼で、考えで、仕事の価値を決めつけて、Tさんを傷つけてしまいました。

もしそこで、仏の価値観を持った母親であったのならば、違った結果になったであろうし、少なくともTさんを傷つけることはなかったでしょう。

このことは、私たちもよくよく気をつけていかなくてはなりません。

今から、およそ一一〇〇年まえの中国に出られた代表的な禅僧に、徳山宣鑑（とくさんせんかん）という方がいらっしゃいます。

この方は、中国北方の出身で、もともと禅僧ではなく学者でありました。特に、『金剛経』を深く研究し、金剛経に関しては誰にも負けないという自負を持っていました。

時を同じくして、南方のほうで禅が盛んになっており、「坐禅によって、自己の本性を徹底し、仏となる」と云って、大きな勢いで広まっていました。

徳山は、「そんなに簡単に仏になれるものではない。全くけしからん。ここはひとつ、禅にかぶれているものを全部参らせてやろう。」こういう大見栄をきって南方に出かけて行きました。

やがて、湖南省の地に到った徳山は、茶店をみつけて「ちょうど疲れてきたところだから、お茶でも飲んで餅をひとつ食べよう」と思って、

店のなかに入りました。

徳山が背負っていた大きな荷物を下ろし、餅を注文しようとすると、その店のお婆さんが重そうな荷物を見て「これは、これは、お坊さま。大きなお荷物をお持ちで。いったいこのなかには何が入っているのですか」と尋ねます。

徳山は、得意になって「これか、これは私の研究しておる『金剛経の注釈本』が入っておるのだ」と答えます。

すると、お婆さんが、

「それでは、その金剛経のなかにある一句について質問しとうございます。もしお答えくだされば、いくらでもお餅を差し上げます。当然、お代は結構です。ご供養させてください。しかし、もしお答えくだされなければ、お餅を差し上げることはできません。そのときは、よそで食べてください。」

徳山は、金剛経については何年もかけて、何度も何度も読み返し、すべてを解釈しているつもりでしたから「なんでも質問しなさい。なんでも答えてやろう。」と得意げに言いました。

「それでは質問致しますが、金剛経のなかに『過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』とありますが、あなたさまが餅を食べたいと思う心は、いったいどの心で食べたいのでありましょうか。」

過去の心は過ぎ去った心であるからつかむことはできない。それなら現在はというと、この世は無常で片時も留まらない。今と言っている今も、すでに過去のものになってしまうから同じようにつかみようがない。当然、未来の心も未だ至っていないわけだからつかみようがない。

非常に鋭い質問です。

頭のなかではすべて解決できると思っていた徳山は、具体的な問題にぶつかってグウの音も出なくなってしまいました。

完全に参ってしまった徳山でしたが、我が強いのか素直に認めることができない。しかし、どう考えても答えようがなく、口を開こうにも開くことができない。

ようやく口を開いた徳山は、「あなたがこんな質問をするということは、きっとこの近くに大きな知識を持った人がいるのでしょう。あなたに智慧をつけたその人を紹介してくれないか」とお願いをしました。

すると、茶店のお婆さんが「お坊さん、あなたのおっしゃる通りです。ここから約一里ほど行ったところに、龍潭（りゅうたん）という和尚さまがいらっしゃいます。もしよろしければ、そちらへお出かけください」

そう云われた徳山は、居ても立ってもいられず、すぐに龍潭のところに向かいます。疲れも吹き飛び、もう餅の問題どころではない。いのちを掛けて研究を重ねた金剛経の問いに答えられなかった。今度は本当のいのちの問題です。

一里ほど歩いて、徳山は龍潭のいるお寺に辿り着きました。

禅マスターである龍潭和尚と会った徳山は、自らいのちをかけて研究をした金剛経で勝負しようとしましたが、コテンコテンにやられてしまいました。

とにかく、禅宗の坊さんをやり込めようという意気込みでやってきたのでありますが、ミイラ取りがミイラになってしまったわけです。

夜も更け、龍潭和尚が「いったいいつまでここにおるつもりじゃ、夜も遅くなったからそろそろお帰りなさい」といって、徳山に帰るようにすすめました。

徳山の方も、いつまでもいては迷惑になると思い、御礼を申して外に出ますと、あたりは真っ暗で何も見えない。

そこで、再び龍潭の処に戻って「申し訳あり

ませんが、あたりが真っ暗で帰ることができません。」というと、龍潭和尚がロウソクに火をつけて持ってきて徳山に手渡そうとしました。

その時、龍潭和尚はロウソクの火を、フゥと吹き消してしまいました。

その瞬間、徳山は大悟徹底、お悟りを開きました。

暗闇のなかで、最も大切な火の明かりを消してしまった。消すぐらいなら、最初から渡さない方がいいというのが理屈ですが、「金剛経こそ価値のあるもので、禅は価値がない」と、偏った価値観をもっていた徳山を目覚めさせる最善の手段だったのです。

そこには、禅僧とか学者とか、光明とか暗闇とか、悟りとか迷いとか、そういった相対的なものの見方を壊してしまった、絶対「空」の価値観。一つのいのちが活き活きと表現されているのです。

『般若心経』のなかの有名な一説に「色即是空・空即是色」という句があります。

我々は別々に存在しています。それが「色」です。私も、皆さんも、この建物も別々です。別々なのだけれども、みんな同じひとつのいのちである。これが「空」です。色即是空です。

その一つのいのちの中で、私たちは別々の存在としてここにいる。これが、転じて「空即是色」ということです。

もう少し、わかりやすく言いますと、

この善光寺の入り口にも大きな桜の木がありますね。春になると桜の花が咲き乱れ、私たちを魅了します。

その花の一つ一つは、同じように見えるのだけれども、一つとして同じものはありません。大きさや形も違うし、同じピンク色でも、赤に近いピンクであったり、白に近いピンクであったり、それぞれ個性を出しています。

その花の一つ一つを、私たち人間に例えることが出来ます。それぞれが個性を出して、それぞれの価値を表現しています。

そして、自分の方が形がいいとか悪いとか、相手の方が色がきれいとか汚いとか、大きいとか小さいとか、花だけを見て比べて生きています。

私たちはつい、桜が咲き乱れる時期には、花だけに目がいってしまいます。しかし、どの花も枝から栄養をもらい、その枝は一つの木から伸びて、やがては目に見えない地中にある根に繋がっています。その根から、生きていくエネルギーをいただき、花を咲かせることが出来るのです。

花だけが独立して存在することはありません。すべて繋がっているのです。

それが、「色即是空・空即是色」ということです。とても大切なところです。

この一本の木のところをしっかりと踏まえて生きていくといかないとでは、大きく違ってきます。

私たちは、自分の置かれている環境のなかで、自分以外の人を意識して生活しています。それはそれで必要なことです。全くないというのも問題です。しかし、必要以上に自分の価値を高めようと意識しすぎて、多くの人はカッコつけたり、失敗しないようにと気を使います。

それと同時に、「自分」を自分の外に意識します。そして、自分自身にも気を使って、価値を高く見せようといい恰好をしようとします。

環境のなかで、現実の自分と理想の自分の間に挟まれて、自分の価値を気にしながら生きることは、精神的エネルギーを消耗させる大きな原因になるのです。そして、自分で自分が分からなくなってしまいます。これは苦痛です。

人の価値は、自分が決めるものでも、他人が決めるものでもありません。「空」、みんな一本の木であり、一つのいのちのなかを、あますことなく、欠くることなく、それぞれに生きているのです。

その一つのいのちを、しっかりと我がものに出来れば、自然と優しくなれます。

姿形が変わるわけではありません。自分の置かれている現状が変わるわけでもありません。だけど、与えられたこの人生を、より豊かに生きることが出来る。そのことを、仏教では三六〇度の転換といいます。ぐるりと一回りして全く同じ場所に戻るということです。何も変わらなくても、精神状態は大きく変わります。

どのように生きても同じ時間がながれます。であれば、心豊かに生きてまいりましょう。そのことが、私たちの大切な亡き方々への、最善の供養になることでしょう。

■インタビュー
共に歩む～総代さん紹介～③

武志大和尚と出会い仏教の大切さを知る

國廣敏郎さん

善光寺の総代で護持会長を務める國廣敏郎さん（85）は、通信機器や半導体など情報・通信系の総合電機メーカーとして知られるＮＥＣ（日本電気）の黎明期を切り拓き、日本のデジタル技術を世界に売り込んだ先駆者の一人である。

東京大学工学部を卒業後、日本初の外国資本（アメリカ）との合弁会社として明治三十二年（一八九九）に設立されたＮＥＣに就職し、米国イリノイ州の州立大学へ三年間留学して最先端の技術を学んだ。帰国後はエンジニア（技術者）として世界各国を飛び歩いてデジタル技術を世界に売り込み、戦後日本の経済成長を支えた日本を代表するエレクトロニクス企業、ＮＥＣの副社長にまで上り詰めた。

一貫して工学畑を歩いてきた國廣さんは、父親の死によって善光寺と出会い、先代の黒田武志住職（大圓武志大和尚）と結ばれた。横浜市の洋光台に住む國廣さんは、父を弔うための寺を探し、近所の知り合いから善光寺を紹介された。善光寺を訪問して、「お寺くさくない、いい寺だな」と思い、すぐに気に入った。

黒田住職と会って話すうちに、その人間的な

魅力に引き付けられた。

「この人は人物だと思った。一介の住職ではなく、もっと大きな本山で活躍されるべきだ！と失礼なことを申し上げたこともある」と振り返る。

際立っていたのは、黒田住職がいつも仏教をやさしく説いたことだ。偉ぶらない振る舞い、法要のときも檀信徒に、ごく普通の日常と変わらぬ言葉で話しかけた。エンジニアだから理屈に合わないことには納得しない。

しかし黒田住職の話を聞き、会話を重ねるうちに、仏教のもつ世界を知り、仏教の大切さが理解できるようになったと言う。

ある時、善光寺の縁で他の寺院の法要に参加し、その寺の住職の話を聞く機会があったが、黒田住職から聞く話とは全く違っていた。だから「善光寺さんと出会えたことはラッキーだった」と喜んでいる。

以来、母親も夫人もみな善光寺のお世話になり、供養している。「いつかは私もお世話になります」と笑っている。

出身は大分県の国東半島の先端にある小さな村。仏教の信仰が篤い土地柄で、村の人は何かあるたびにお寺へ集まった。米国でもキリスト教の教会を中心とした市民の生活があった。寺や教会を中心に人々が生活する地域社会のあり方を國廣さんは素晴らしいと思う。

「葬式はちゃんとやってほしいが、葬式仏教だけではダメ。寺を中心とした心の交わり、檀家や地域との交流が大切。お寺が地域の中心になれば、日本はもっとよくなる」と言う。

独り身になった現在の趣味は俳句や詩吟。妻を亡くして二～三年ほどした頃、妻の友人たち

に誘われて俳句の会に顔を出すようになり、俳句の魅力に目覚めた。「句会に出て、互いのセンスを読み合い、批評し合う雰囲気が気に入った」。今では句会に出るのを楽しみにしている。

最先端の技術者として活躍してきた國廣さんの人生観は、善光寺との出会いで大きく変わったと言えるかもしれない。

▶「心はコンピュータでは変わらない。文学は理学よりも歴史的いのちがはるかに長い」と話す國廣さん

■成寿アーカイブ　第三十巻（平成十一年十二月発行）より

黒田武志善光寺前住職が発願し発刊された『成寿』も四十四巻を数えます。檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。「おもてなし」の心。「日本の心」の大切さを母校である駒澤大学茶道部の学生に向けて説かれた一文です。

駒澤大学茶道部五十年に寄せて

茶禅一味

善光寺住職　黒田武志

茶は服のよきように点て
炭は湯の沸くように置き
花は野にあるように

夏は涼しく冬暖かに
刻限は早めに
降らずとも傘の用意
相客に心せよ

これは、茶道を学ぶ方ならきっと誰もがご存じの、茶聖・利休居士の教えられた七則です。

学生（駒澤大学）の私が初めてこの教えを知り、一語、一語に内包された深い人生哲学に抱いた感無量の思い――それは、半世紀たとうとしている今も鮮やかに胸に甦ってきます。

利休居士とその茶の湯を伝える「茶道の聖典」とも称される『南方禄』には、居士の尊い教えが数多く残されておりますが、七則は、私たち人間の、根源的な生きる姿を教えてくださっているように思います。

今から四百年以上前、ある人が利休居士の茶の湯の心持ちの極意・秘事を尋ねたときに、居士はこの言葉を残されました。あまりにもあたりまえのことのようで、秘事でも何でもないように感じたその人が、

「それくらいのことなら、私も存じておりますが」

と不服そうに言うと、利休居士は静かにこうお答えになられました。

「それでは今私が言ったように、私を招いてくださいませんか。そうすれば、私はあなたの弟子になりましょう」。

あまりにもあたりまえのように思えたこと、それが実は、実践するにはとてつもなくむずかしいことだと、そのときその人は気づいたことでしょう。

この話を、大徳寺の笑嶺宗訴という、利休居士の参禅の師が聞き、

「利休の答えはもっともなことである。昔、唐の時代の代表的な詩人・白楽天が、名高い鳥窠禅師に、〝仏法の極意とは何ですか〟と尋ねたときに、〝諸悪莫作　衆善奉行〟とお答えになった。これは、――もろもろの悪をなさず、あらゆる善行を行え――というごくあたりまえのことである。白楽天が、〝そんなことなら三歳の童子でも知っていますよ〟というと、鳥窠禅師は、〝三歳の童子でも知ってはいるが、さて、八十歳の老翁でも行うことはたいへんむずかしいことである〟とおっしゃった。白楽天はひどく自分を恥じて、深く和尚に帰依したという。利休の答えはそれと同じことだよ」

と語られたといいます。

私も、仏の道を選び歩んで四十数年……まだまだ、日々、修行の毎日であり、これでよしと感じたことはありません。それは、お茶の稽古のたびにも思ったことでありました。ただ、未熟ながらも学び続けていると、一服のお茶をいただく――そのことだけのために命をかけた利休居士の、そして先達の茶人たちの生きように思いをはせ、いかに何でもないことを大切にしてきたかということに感動し、心が浄われていく感覚を味わうことができるようになりました。

わが国に喫茶の風習が伝わったのは、千二百年前の平安後期といわれます。鎌倉時代には、栄西禅師によって〝茶の湯〟としての法が中国よりもたらされ、はじめは禅院で行われていたものが次第に当時の大名たちの生活に取り入れられていきました。このことがお茶と禅宗が深く結ばれている端緒となっています。中国においては良薬あるいは娯楽であったお茶を〝茶道〟という精神文化にまで高めたのが、桃山時代に生きた宗匠・千利休でした。

大坂・堺の納屋衆（堺の富商）に生まれた利休居士は十七歳のときに茶匠北向道陳に茶の湯を学び、またその紹介によって竹野紹鷗に師事して奥義を究めました。この紹鷗師の指導と自らの研鑽によって工夫し、この間、大林宗套、笑嶺宗訴などの師について参禅修行を重ね大いに悟るところがあり、抛筌斎の号、宗易という法名を与えられました。筌とは魚をとるウケのことで、その筌を投げ捨てるという意味の名は、魚を得てしまえばもはや魚をとる道具はいらない。悟りを得たならば、その悟りすらもわすれてしまうという、利休居士の境地の高さがうかがえるような気が私にはいたします。

利休居士は、

「茶の湯を習うは仏法を習うなり」

と語っておられますが、まさに茶禅一味、その一挙手一投足、戸の開け閉めにいたるまで、その物事を通じて自己をみつめ、自己をならい、真実の自己に極めていこうとする姿勢は、私も学んできた禅の修行そのものなのです。道元禅師も、「仏道をならふといふは、自己をならふなり、自己をならふといふは、自己をわするるなり、自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。自己の身心、お

よび陀己（たこ）の身心をして脱落せしむるなり」と言われましたが、禅とは、自己の奥に向かっていく心の旅であり、表面的な知識ではなく、体験から人間の本質、すなわち、人間がいったい何であるかを模索していく試みであるといえます。己の心のあり方を学ぶ――これは、利休居士のおっしゃった〝七則〟の深い哲学だと思うのです。

人間として自然にあることの尊さを知り、何かに縛られたりとらわれたりすることなく、あるがままに生きていく。いくら文明が発達し、時代の流れが変わろうとも、花が美しいと感じる心は幾千年たとうとも、国籍や性別が異なろうとも普遍的に変わらない、人として生まれながらに誰もが持つ仏性です。

七則に充ちている相手を思いやる心、それは世のすべてのものに感謝ができたとき、生かされていることに感謝できたとき、自然に生まれでるものであり、何ら見返りを求めない美しい魂です。すべてのものに感謝したとき、私たちは、すでに自分が満ち足りていることに気づきます。足ることを知れば、それ以上の何らかの飾りつけや贅沢は、まったく必要ないものであり、そこには美しささえありません。

華美な飾り、奢り、贅沢な心をどんどんと削ぎ落として、磨いて、そして最後に到達した、大宇宙に溶け込んでしまう自然の美を尊ぶ精神で〝侘（わ）び〟という世界を創りだしていった利休居士は、まさに無限の大きさを持った禅僧であり哲学者であったといえましょう。

豊臣秀吉の台頭に従って茶名を挙げ、天下一宗匠と称せられることとなる利休居士ですが、絢爛豪華を抑え、枯淡の中にひとかたならぬ英知と王侯貴族をしのぐ気概を持つ〝侘び〟の精神を持つ、超越した茶人を、秀吉はどれほど憧れ、そして、畏怖したことでしょう。

利休居士が点前をすると、時が幽玄な優美さに溶けていき、茶室は一つの小宇宙と化し、茶道具も火も湯も花も風もみな利休と一つになって、雅な調和を保ち、そのまま次元を超えて昇華していく……自分をはるかに超越した、あまりにも異質で尊い人を目の前にするたびに、秀吉は金色に輝く豪華さのみを求めた自分との違いに、みじめな気分を味わっていったのではないでしょうか。

憧れや羨望はやがて、嫉妬へと変わり、正しい人間としての見方ができなくなっていった天下人は、とうとう捉えどころのない利休の正体をつかめないことに焦り、自分の目の前から消し去ってしまおうとしました。利休居士が秀吉の命により堺に蟄居し、京に呼び戻されて自刃したのは、居士が七十歳のときのこと。私は思うのです。この世での生を終わるその瞬間まで利休居士は、秀吉の仏性を観じ、何の恨みも未練も残さず、それどころから感謝の心を抱いて安らかに逝かれたのではないか、と。

家は帰らぬほど、食事は飢えぬほど。
茶の湯とは
ただ湯をわかし茶をたてて
飲むばかりなる事と知るべし

頂点まで究めた人が、究めつくして戻ってくる原点が、残されたこれらの言葉に凝縮されているような気がします。茶道というのは、禅の思想の中に日本人ならではの美意識が付随し、利休居士ほど超越した人物でなければ一生かかってもそれを完璧には体得することはできない道なのかもしれません。しかし、人間として何を大切に生きていったらいいのかを学びながら生きていくということほど尊いことはないと私は考えます。お茶を通して、真の自己を学ぶ—

―そうした精神が日本人の中には息づいており、戦後の混乱からもみごとに立ち上がることができ、救われてきたのだと思うのです。

昭和二十六年、駒澤大学茶道部は、利休居士の教えられた四規〝和敬静寂〟を根本精神とし発足、以来、顧問・鈴木宗保先生、講師・鈴木宗幹先生を始め、多くの諸先輩方の御尽力によって、脈々と五十年続いてまいりました。

和敬静寂――これはまさに禅の心に通ずる茶道精神そのものであります。それは、人の生きる道そのもの・心を高める精神修養の道そのものといいかえてもよいと思います。

和――調和の心、人間同士和し合う心の大切さ。和は茶道の本質です。相手を思いやる心のこもった作法の中から生まれる和らぎ、和やかさ、慎ましやかさ。あらゆる人と人との交流、たとえば亭主と客、夫と妻、親と子、民族と民族……も、この〝和〟を尊ぶ心され忘れなければ、大自然、大宇宙とも調和することができ、宇宙の法則に反する争いごとは、世の中からいっさいなくなるはずなのです。利休居士の時代、茶の湯を学ぼうとする者は、大名や裕福な商人たちでした。たとえどんなに身分が高くても、刀を置き、頭を低くしてにじり入る、このことによって自分の地位ではなく人間性に尊きをおき、すべての人が平等であるということを認識する異空間、それが茶室だったのです。現代ではとくに、この〝和〟の心の大切さをあらためて人は学び直してみるべきだと私は考えます。

敬――和とともに大切なのは、相手を敬う心です。茶の湯はあらゆる面で、敬意と尊敬の精神を必要としています。これは、無理にそうあ

ろうとしなくても、「今現在のこの方とお逢いするのは生涯でただ一度きりのこと。この茶会は生涯でただ一度きりのものである」という一期一会の精神を持つ人ならば、自然に現れる心の動きだと思います。一瞬一瞬は〝唯一、このときだけ〟大切に生きる。〝今〟という時の重要性を理解していれば、おのずと人に対しても自分をとりまくすべての自然に対しても――一輪の花、一滴の水に対しても――、敬意が、そして真心が生まれるものだと思います。

清（静）――客が到着する前に、細心の注意を払って露地に水を打つ。このことによって清められるのは、その人の魂だと私は思います。茶室にいるひととき、日常の雑事から離れ、心のすみずみまで清められていくような気がいたします。さまざまな垢を削ぎ落としたとき、そこに自己の本質を見つけることができるのです。その清らかな魂を、どんな日常にいても忙しさの中にいても持ち続けることが修行であると私は思うのです。

寂――〝禅〟というのはサンスクリット語で、〝心を静かにする〟という意味です。どんなことがあっても動じず、とらわれず、いつも平静で済みきった状態が、寂に通ずる心だと思います。動いているときには決して聞こえてこなかった音――水をそそぐ音、釜を鳴らす松風、そして、外からではなく内からの静かな声。茶禅一味、その声に耳を傾ける時を私たちは持つことができるのです。盲目的な激情を捨て、私たち本性は、みな仏性だということを自覚できるはずなのです。

〝和敬静寂〟という四つの言葉にこめられた奥深さを、茶道部に籍をおいた方々はその後の人生で、いっそう深く味わい、どんな境遇にい

たとしても一生の財産として子に孫に伝えていかれていることでしょう。

茶道部創立当時から私たちを指導してくださった鈴木宗保先生は、この利休居士の精神をそのまま我々に伝えてくださった偉大な師でありました。明治十五年にお生まれになり、明治四十四年より京都裏千家で修業、大正五年には裏千家業躰となられました。茶の湯に関するご本も数多く出版なさり、多くの門弟に愛されながら昭和五十五年九月、数え年九十九歳でこの世での生を終わられました。空前ともいえる茶人のご長寿であられました。宗保先生の句歌集『太翁』を読ませていただくと、先生の、あまりにも自然体で一瞬一瞬を大切に生きてこられた姿が現れており、感動がわき上がってまいります。門弟一同による『太翁』のあとがきには次のように書かれています。

『大先生は朝がたいへん早いでした。弟子ががんばって、かなり早く馳せ参じても、それより一段早く炉に火を入れられ、水屋の準備もすっかり終えられて、冬ならば釜の上に新聞を広げて、コタツ代わりに暖をとっておられました。

――中略――最晩年の大先生は、厳しい面よりも、ほのぼのとした温かい慈愛の方が勝っておりましたが、お亡くなりになる前の年につけられた紹鷗棚の稽古は猛烈果敢でした。総員総点検で弟子どもは震えあがりました。しかしこれは特例で、晩年は二、三番稽古をつけられるとプイと立っていかれて、茶の間でサラサラと短冊を認められ、出来がよいとニコニコしながら稽古席に再出馬され、ポイと誰かの膝の上にそれを投げつけられるのでした。そうしていただいた短冊が幾つか積もって今回の句歌集の一端をなしているのです……』

目を閉じれば、なつかしく、宗保先生の仏さまのような慈愛に満ちた笑顔が、瞼の裏に浮かんでまいります。私にとっても、きっとみなさんにとっても青春時代の輝かしい一シーンの、尊い出会いでありましょう。

照りつづく露地をぬらして朝茶かな
四分の一松よろよろと吹かれ居る
冬至湯の肩までいれて九十四

私が先生の境地に達して冬至湯の肩までつかるには、まだ三十年の月日を待たなければなりません。

「あの人にはお茶がある」という表現がありますが、さりげない仕種や動作の中に、利休居士の魂を感じさせていただける先生でありました。そしてもちろん、その後を受け継がれた若先生である鈴木宗幹先生にも、宗保先生の茶道精神・生きる姿勢が息づいておられました。そして私たち茶道部の門弟に、全情熱を傾けてご教授くださったのです。

五十年――一口にいいましても、一世紀の半分という長きに亘って、世の中の流れにとまど

うことなく伝統を維持し続けるというのは、並大抵の努力ではなかったと思います。

創立当時の諸先輩方が作ってくださった〝茶道部規約〟が現在も後輩にほとんど変わることなくたしかに受け継がれ守られていることにも、それがあたりまえとは思わずに、感嘆と驚きを感じるものであります。

昭和三十四年に駒澤大学を卒業し、大学院に進み、その後、二十歳代の後半では、雨風にさらされてほとんど無一文の状態での全国托鉢行脚を体験しました。利休居士のおっしゃった「家はもらぬほど、食事は飢えぬほど」にさえも届かない野宿生活の中、厳しい現実に打ち負かされそうになりながらも、茶道部での日々で心身に浸透した和敬静寂の根本精神が、いつどんなときも生きてくれたのです。私はこのときの体験で、自然から受ける恩恵、自分が活かされている尊さに気づくことができました。以来、苦しいことも嬉しいこともすべてを超越して、来るもの皆よし、すべてありがたいという境地に達することができ、仏の教えの真の意味を実感したのです。ほんの少し、道元禅師に、そして、利休居士の魂に近づけたような思いがし、それと同時に自分の弱さ、無学さを思い知り、あらためて自己を高めるため修行し直したのでした。

昭和四十二年、茶道部が時代の転換期を迎えている頃、私は三十歳で布教と修行のためにアメリカに渡りました。高校生の頃の私は、ただ漠然と、無限の可能性が秘められているような超大国に憧れを抱いていただけでした。しかし、茶道を学び、禅を学び、托鉢行脚で自己を学んだ私は、タイやアメリカに暮らすほどに、深く日本人としての誇りを持って茶道精神や禅の思想について話せるようになりました。西洋人の

目で、日本の文化・宗教を見つめ直してみると、そこにあったのは大きな驚きと新しい発見の連続でした。継承された伝統的なものが素晴らしいのはなぜか。それは、ただ長く続いているから価値があるのではなく、どんな時代においても何世紀もの間、頑なにそれを守って後世に伝えようとした方々の努力が光り輝いて息づいているからなのです。

我が茶道部についても、まったく同じことが言えると思うのです。

今から一世紀近くも前に岡倉天心が『茶の本』を英語で書き、日本の茶道精神を西洋に伝えたのも、西洋でさまざまな体験を積み、あらためて日本の素晴らしさを再発見したからこそではないでしょうか。その時代というのは、日本人がこぞって西洋化しようとしていた頃だったというのに……。

終戦後五十余年、西洋文明とその考え方にどっぷりつかりそうになる時代の中で、温故知新の精神で誇りを持って茶道部を絶やすことなく継承してきた先生方、先輩後輩のみなさんに、私は深い敬意を払わずにはいられません。

今、経済大国となった日本はさまざまな意味で世界から注目されています。科学の進歩はめざましく、コンピュータやＬＳＩによって、世界との距離と時間はどんどん短縮されました。そんな時間の中で、私たちは常に断片でものを見る習慣がつき、全体像を見ることが苦手になってしまいました。次々と展開する新しいことばかりに心奪われ、自然との触れ合いや美しさ、宇宙の法則の偉大さに感謝するよりも、自分の自己的な欲ばかりに興味を持つようになってしまいました。国や会社の発展だけを目標にがむしゃらに走った結果、金銭的には豊かになり生活は便利になりました。なのに、人々の表情がゆったりと満たされていないのはなぜなのでし

ようか。想像もつかないような破壊力を持つ兵器を使った戦争の脅威、じわじわ進む環境破壊、飢えで泣く子どもたち……グローバルな視野に目を向けたとき、そこには不安が広がっているのです。世界の全体像を見渡せば、日本人が昔から大切にしてきた和の精神を二十一世紀に向けて広げることが、世界平和のためにいかに重要な使命かということがわかってくると思うのです。

茶道部創立五十年、きっと二十一世紀には、六十年、七十年、百年と祝えることでしょう。創立当時の美しい茶道精神が、必ず生き続けているはずです。

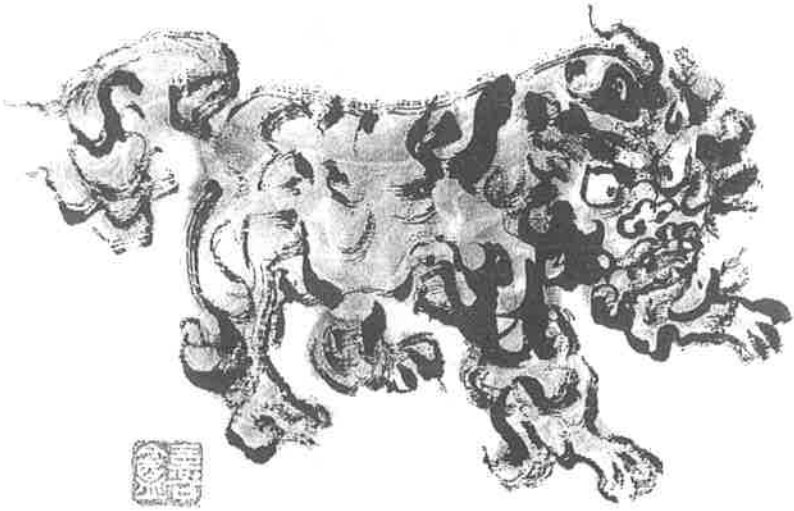
めまぐるしく変わっていく時代の中で、この、十六世紀から変わらぬ茶室という空間に身をおくと、この上ない安らぎに満たされてまいります。茶道は私たち日本人の心の原点です。調和を基として雅な美しい文化の国、それが私たちの日本です。

「どうぞ、お茶を一服召し上がれ」

そうした意味のある『喫茶去』は、茶道部伝統の機関誌名でもありますが、歴代茶道部員が誰でもその書名をなつかしく覚えていることでしょう。そして、きっとその、「お茶でもいかが」の精神によって素晴らしい人間関係や出会いを人生の中で築きあげていることでしょう。さらに、さりげなく、しかし一所懸命相手を思いやる〝七則〟の精神が子から孫、後世へと生き続ける限り、時代、国境、民族、文化、習慣、宗教……、人と人との間にあるかのように見えるどんな垣根も、またたくまに消えていくと思うのです。

日本人として生を享け、永い時間をかけて育まれてきた禅・茶の湯という心の宝。それを私たち一人ひとりが持っています。茶道部を卒部していった方々の数、現部員のみなさんの数は

合わせても、まだ、世界の人口から見れば、針で突いた点にも満たないかもしれません。しかし確実に世界平和の大輪を咲かせる小さな種蒔き人となる方々であり、二十一世紀を救う方々であると私はかたく信じております。



―そうした精神が日本人の中には息づいており、戦後の混乱からもみごとに立ち上がることができ、救われてきたのだと思うのです。

昭和二十六年、駒澤大学茶道部は、利休居士の教えられた四規〝和敬静寂〟を根本精神とし発足、以来、顧問・鈴木宗保先生、講師・鈴木宗幹先生を始め、多くの諸先輩方の御尽力によって、脈々と五十年続いてまいりました。

和敬静寂――これはまさに禅の心に通ずる茶道精神そのものであります。それは、人の生きる道そのもの・心を高める精神修養の道そのものといいかえてもよいと思います。

和――調和の心、人間同士和し合う心の大切さ。和は茶道の本質です。相手を思いやる心のこもった作法の中から生まれる和らぎ、和やかさ、慎ましやかさ。あらゆる人と人との交流、たとえば亭主と客、夫と妻、親と子、民族と民族……も、この〝和〟を尊ぶ心され忘れなければ、大自然、大宇宙とも調和することができ、宇宙の法則に反する争いごとは、世の中からいっさいなくなるはずなのです。利休居士の時代、茶の湯を学ぼうとする者は、大名や裕福な商人たちでした。たとえどんなに身分が高くても、刀を置き、頭を低くしてにじり入る、このことによって自分の地位ではなく人間性に尊きをおき、すべての人が平等であるということを認識する異空間、それが茶室だったのです。現代ではとくに、この〝和〟の心の大切さをあらためて人は学び直してみるべきだと私は考えます。

敬――和とともに大切なのは、相手を敬う心です。茶の湯はあらゆる面で、敬意と尊敬の精神を必要としています。これは、無理にそうあ

ろうとしなくても、「今現在のこの方とお逢いするのは生涯でただ一度きりのこと。この茶会は生涯でただ一度きりのものである」という一期一会の精神を持つ人ならば、自然に現れる心の動きだと思います。一瞬一瞬は〝唯一、このときだけ〟大切に生きる。〝今〟という時の重要性を理解していれば、おのずと人に対しても自分をとりまくすべての自然に対しても――一輪の花、一滴の水に対しても――、敬意が、そして真心が生まれるものだと思います。

清（静）――客が到着する前に、細心の注意を払って露地に水を打つ。このことによって清められるのは、その人の魂だと私は思います。茶室にいるひととき、日常の雑事から離れ、心のすみずみまで清められていくような気がいたします。さまざまな垢を削ぎ落としたとき、そこに自己の本質を見つけることができるのです。その清らかな魂を、どんな日常にいても忙しさの中にいても持ち続けることが修行であると私は思うのです。

寂――〝禅〟というのはサンスクリット語で、〝心を静かにする〟という意味です。どんなことがあっても動じず、とらわれず、いつも平静で済みきった状態が、寂に通ずる心だと思います。動いているときには決して聞こえてこなかった音――水をそそぐ音、釜を鳴らす松風、そして、外からではなく内からの静かな声。茶禅一味、その声に耳を傾ける時を私たちは持つことができるのです。盲目的な激情を捨て、私たち本性は、みな仏性だということを自覚できるはずなのです。

〝和敬静寂〟という四つの言葉にこめられた奥深さを、茶道部に籍をおいた方々はその後の人生で、いっそう深く味わい、どんな境遇にい

たとしても一生の財産として子に孫に伝えていかれていることでしょう。

茶道部創立当時から私たちを指導してくださった鈴木宗保先生は、この利休居士の精神をそのまま我々に伝えてくださった偉大な師でありました。明治十五年にお生まれになり、明治四十四年より京都裏千家で修業、大正五年には裏千家業躰となられました。茶の湯に関するご本も数多く出版なさり、多くの門弟に愛されながら昭和五十五年九月、数え年九十九歳でこの世での生を終わられました。空前ともいえる茶人のご長寿であられました。宗保先生の句歌集『太翁』を読ませていただくと、先生の、あまりにも自然体で一瞬一瞬を大切に生きてこられた姿が現れており、感動がわき上がってまいります。門弟一同による『太翁』のあとがきには次のように書かれています。

『大先生は朝がたいへん早いでした。弟子ががんばって、かなり早く馳せ参じても、それより一段早く炉に火を入れられ、水屋の準備もすっかり終えられて、冬ならば釜の上に新聞を広げて、コタツ代わりに暖をとっておられました。

――中略――最晩年の大先生は、厳しい面よりも、ほのぼのとした温かい慈愛の方が勝っておりましたが、お亡くなりになる前の年につけられた紹鷗棚の稽古は猛烈果敢でした。総員総点検で弟子どもは震えあがりました。しかしこれは特例で、晩年は二、三番稽古をつけられるとプイと立っていかれて、茶の間でサラサラと短冊を認められ、出来がよいとニコニコしながら稽古席に再出馬され、ポイと誰かの膝の上にそれを投げつけられるのでした。そうしていただいた短冊が幾つか積もって今回の句歌集の一端をなしているのです……』

目を閉じれば、なつかしく、宗保先生の仏さまのような慈愛に満ちた笑顔が、瞼の裏に浮かんでまいります。私にとっても、きっとみなさんにとっても青春時代の輝かしい一シーンの、尊い出会いでありましょう。

照りつづく露地をぬらして朝茶かな
四分の一松よろよろと吹かれ居る
冬至湯の肩までいれて九十四

私が先生の境地に達して冬至湯の肩までつかるには、まだ三十年の月日を待たなければなりません。

「あの人にはお茶がある」という表現がありますが、さりげない仕種や動作の中に、利休居士の魂を感じさせていただける先生でありました。そしてもちろん、その後を受け継がれた若先生である鈴木宗幹先生にも、宗保先生の茶道精神・生きる姿勢が息づいておられました。そして私たち茶道部の門弟に、全情熱を傾けてご教授くださったのです。

五十年――一口にいいましても、一世紀の半分という長きに亘って、世の中の流れにとまど

うことなく伝統を維持し続けるというのは、並大抵の努力ではなかったと思います。

創立当時の諸先輩方が作ってくださった〝茶道部規約〟が現在も後輩にほとんど変わることなくたしかに受け継がれ守られていることにも、それがあたりまえとは思わずに、感嘆と驚きを感じるものであります。

昭和三十四年に駒澤大学を卒業し、大学院に進み、その後、二十歳代の後半では、雨風にさらされてほとんど無一文の状態での全国托鉢行脚を体験しました。利休居士のおっしゃった「家はもらぬほど、食事は飢えぬほど」にさえも届かない野宿生活の中、厳しい現実に打ち負かされそうになりながらも、茶道部での日々で心身に浸透した和敬静寂の根本精神が、いつどんなときも生きてくれたのです。私はこのときの体験で、自然から受ける恩恵、自分が活かされている尊さに気づくことができました。以来、苦しいことも嬉しいこともすべてを超越して、来るもの皆よし、すべてありがたいという境地に達することができ、仏の教えの真の意味を実感したのです。ほんの少し、道元禅師に、そして、利休居士の魂に近づけたような思いがし、それと同時に自分の弱さ、無学さを思い知り、あらためて自己を高めるため修行し直したのでした。

昭和四十二年、茶道部が時代の転換期を迎えている頃、私は三十歳で布教と修行のためにアメリカに渡りました。高校生の頃の私は、ただ漠然と、無限の可能性が秘められているような超大国に憧れを抱いていただけでした。しかし、茶道を学び、禅を学び、托鉢行脚で自己を学んだ私は、タイやアメリカに暮らすほどに、深く日本人としての誇りを持って茶道精神や禅の思想について話せるようになりました。西洋人の

目で、日本の文化・宗教を見つめ直してみると、そこにあったのは大きな驚きと新しい発見の連続でした。継承された伝統的なものが素晴らしいのはなぜか。それは、ただ長く続いているから価値があるのではなく、どんな時代においても何世紀もの間、頑なにそれを守って後世に伝えようとした方々の努力が光り輝いて息づいているからなのです。

我が茶道部についても、まったく同じことが言えると思うのです。

今から一世紀近くも前に岡倉天心が『茶の本』を英語で書き、日本の茶道精神を西洋に伝えたのも、西洋でさまざまな体験を積み、あらためて日本の素晴らしさを再発見したからこそではないでしょうか。その時代というのは、日本人がこぞって西洋化しようとしていた頃だったというのに……。

終戦後五十余年、西洋文明とその考え方にどっぷりつかりそうになる時代の中で、温故知新の精神で誇りを持って茶道部を絶やすことなく継承してきた先生方、先輩後輩のみなさんに、私は深い敬意を払わずにはいられません。

今、経済大国となった日本はさまざまな意味で世界から注目されています。科学の進歩はめざましく、コンピュータやＬＳＩによって、世界との距離と時間はどんどん短縮されました。そんな時間の中で、私たちは常に断片でものを見る習慣がつき、全体像を見ることが苦手になってしまいました。次々と展開する新しいことばかりに心奪われ、自然との触れ合いや美しさ、宇宙の法則の偉大さに感謝するよりも、自分の自己的な欲ばかりに興味を持つようになってしまいました。国や会社の発展だけを目標にがむしゃらに走った結果、金銭的には豊かになり生活は便利になりました。なのに、人々の表情がゆったりと満たされていないのはなぜなのでし

ようか。想像もつかないような破壊力を持つ兵器を使った戦争の脅威、じわじわ進む環境破壊、飢えで泣く子どもたち……グローバルな視野に目を向けたとき、そこには不安が広がっているのです。世界の全体像を見渡せば、日本人が昔から大切にしてきた和の精神を二十一世紀に向けて広げることが、世界平和のためにいかに重要な使命かということがわかってくると思うのです。

茶道部創立五十年、きっと二十一世紀には、六十年、七十年、百年と祝えることでしょう。創立当時の美しい茶道精神が、必ず生き続けているはずです。

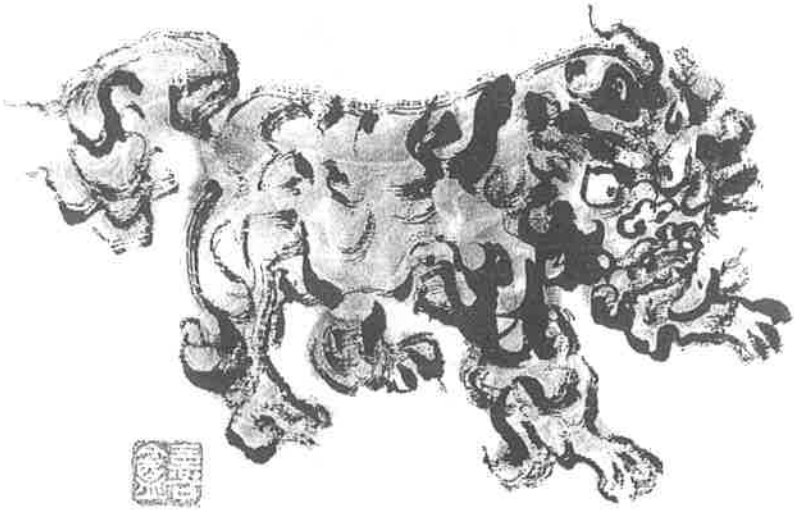
めまぐるしく変わっていく時代の中で、この、十六世紀から変わらぬ茶室という空間に身をおくと、この上ない安らぎに満たされてまいります。茶道は私たち日本人の心の原点です。調和を基として雅な美しい文化の国、それが私たちの日本です。

「どうぞ、お茶を一服召し上がれ」

そうした意味のある『喫茶去』は、茶道部伝統の機関誌名でもありますが、歴代茶道部員が誰でもその書名をなつかしく覚えていることでしょう。そして、きっとその、「お茶でもいかが」の精神によって素晴らしい人間関係や出会いを人生の中で築きあげていることでしょう。さらに、さりげなく、しかし一所懸命相手を思いやる〝七則〟の精神が子から孫、後世へと生き続ける限り、時代、国境、民族、文化、習慣、宗教……、人と人との間にあるかのように見えるどんな垣根も、またたくまに消えていくと思うのです。

日本人として生を享け、永い時間をかけて育まれてきた禅・茶の湯という心の宝。それを私たち一人ひとりが持っています。茶道部を卒部していった方々の数、現部員のみなさんの数は

合わせても、まだ、世界の人口から見れば、針で突いた点にも満たないかもしれません。しかし確実に世界平和の大輪を咲かせる小さな種蒔き人となる方々であり、二十一世紀を救う方々であると私はかたく信じております。



■やすらぎの塔開眼式・合同合祀慰霊祭

去る五月十二日、善光寺住職導師の下、「やすらぎの塔」開眼式と合同合祀慰霊祭が執り行われました。

合同合祀慰霊祭では、やすらぎの碑より安置期間の経過した御霊をやすらぎの塔へ埋葬致しました。縁故者や関係の方約二十名の参列の中、一時間半にわたりねんごろなるご供養が営まれました。

住職による開眼

■豊川稲荷と伊勢神宮　参　拝

平成二十六年四月十六日・十七日

恒例の善光寺旅行会、今回は豊川稲荷（愛知県豊川市）と伊勢神宮（三重県伊勢市）を参拝致しました。住職を初め参加者・総勢三十五名、バス一台。

一日目、「日本三大稲荷」の一つとして有名な豊川稲荷を参詣。

豊川稲荷は、正式には「円福山（えんぷくざん）豊川閣（とよかわかく）妙厳寺（みょうごんじ）」と称する曹洞宗寺院で、鎮守の吒枳尼真天（だきにしんてん）のお姿が狐に似ているところから〝豊川のお稲荷さん〟と呼ばれ、商売繁盛など大変ご利益があるということです。

入母屋造りの総門をくぐると、そこには壮大で厳かな境内堂宇があり、一同足を止めて感嘆

しました。

受処入口右側には日本で現役最古といわれる真っ赤な郵便ポストもありました。

手入れの行き届いた日本庭園の見える離れでお茶のご接待を受け、案内された本堂では、多くの僧侶による読経ご祈祷を頂戴し、堂内を参観参拝させて頂きました。

お昼は岡崎市内で本場の味噌煮込みうどんに舌鼓。有名な味噌蔵を拝見できなかったのが残念でした。

宿泊は鳥羽温泉のホテル。

二日目、早朝よりホテルからほど近い二見ヶ浦を散策し、その後、伊勢神宮へ。

昨年式年遷宮が行われた伊勢神宮。

のんびりと森林浴気分に浸りながら、豊受大神宮（外宮）を参詣。そして五十鈴川の清涼なせせらぎで身を清め、天照大御神のおわします内宮をお参りさせて頂きました。

ガイドさんに色々とご紹介いただいた中で、特に印象に残ったのは「なにごとのおわすものかはしらねども　かたじけなさに涙ながるる」という神宮を訪れた西行法師の詩があるということです。苑全体の静かな雰囲気になんとなく納得させられたのでした。

「おかげ横丁」でお昼を頂き、一路帰路に。

おかげさまで、両日とも好天に恵まれ、穏やかな陽光のもと、和やかな、たいへんありがたい、そして楽しい参拝旅行でありました。

合掌

善光寺
善光寺

■善光寺講座『論語からのお話』

東郷先生の論語講座。二年目に入り益々意気盛ん。日常茶飯事、いまの問題や課題について明解に「道」を通じてお示し下さる先生の情熱に引かれるように受講者も回を追うごとにさらに増加しています。

「子曰く、憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず。一隅を挙げて三隅を以って反せざれば、則ち復びせざるなり。」

受講者もお互いに毎日の生活の中に活かせる教えを自己の啓発につとめ吸収します。賑々しい会です。

老いも若きも幼きも、そして現役ビジネスマンもウーマンも生き方、考え方の視点を変えてみてはいかがでしょう。

どうぞお越し下さい。お待ちしております。

善光寺講座「論語からのお話」

～参加者からのお便り～

▽口野　健太郎さん

この度は『成寿』への投稿の機会を頂戴し、真に光栄に存じます。東郷先生の善光寺講座「論語からのお話」には平成二十五年より夫婦で参加しております。私は会社で台湾・韓国関係の仕事をしており、以下の理由から論語の勉強を始めました。

・仕事には法務、経理だけではなく、倫理的な判断基準が必要です。

・論語を学ぶことで台湾人、韓国人の考えの理解に繋げようと思ったこと。

また、台湾人の妻は、子供の頃から馴染のあった漢字に出逢い、『論語』を通じて、一層日本語や日本社会への理解を深めています。

講座の一年目は日々、「論語」から学んだ啓発の心得で仕事に取り組み、目の前の問題について考え抜き、判断し実行する習慣が身に付きました。

しかし、仕事の多忙さから、周りが見えなくなることがあったことを省みて、二年目は、限りなく**「人の為に謀りて忠ならざるか」**と、帰宅する電車の中で毎日自問自答しております。これが「学習」です。

東郷先生は論語の解釈のみならず、日々何をすればよいのかを平易な言葉で説明して下さり、その実践を重ねることで、生活や仕事によい変化があらわれてきます。

「人の為に謀りて……」というと難解に聞こえますが、他人を思い遣る気持ちがあったか、

相手に笑顔で挨拶ができているかと、いうことなのです。簡単だけど難しい。意識するのとしないのとでは結果が違ってきます。日々刻々が「論語」の実践です。

忙しくても必ず挨拶をすると決めれば、自ずと同僚との仕事の進み具合、体調、精神状態にも関心が向かうようになってきました。論語は、会社で中間管理職になった私に、上と下との板挟みから抜け出させて、良い変化をもたらしてくれたと実感しております。

二年間、論語の会に参加して改めて思うのは、人間は忘れる生き物だということです。

しかし、月に一回論語の会に参加して、忘れては思い出しを繰り返すことで、徐々にではありますが、私のような者にも進歩があったのではないかと感じております。

東郷先生は素読と暗誦、浮かんだことはとにかく実行してみることが大事とくり返されます。また、ユーモア溢れるお話は面白く、参加者の皆様からも毎回刺激を頂いております。今後とも学習を続けて参りますので、宜しくお願い申し上げます。

▽高杉　富美子さん

善光寺様とは平成十八年に仏縁をいただきまして、自分が変わってゆく大切な切っ掛けとなりました。それまで「生きてきた」と思っていましたが、漸く「生かせていただいている」ことに気づき、嬉しく思っています。正に「一期一会」でございました。お彼岸法会、お盆、新年祈祷会と参加させて頂き、尊いご法話をお聞きしてゆくうちに、『般若心経』の尊さや、お供えの意味、ご先祖様と亡き人の追善供養のこと、父母へ感謝すること、あらゆる精霊に感謝

すること……などを心新たに知りました。

平成十九年から写経会にも参加させて頂き、有り難い事です。さらに信仰心、仏心を育むことができたらと思う日々でございます。ご法話で優しくお導き下さる方丈様、各寺の住職様、先生方に深謝の気持ちでいっぱいです。

そんな折り柄、東郷先生の講座が始まるお知らせに飛びつき、難しい論語なのに、身近な問題を次々解答し方向をお示しくださって、感動しました。嬉しかったです。

私は何も知りません。それでも、東郷先生のお話を聞くうちに、少しずつ分かってきて、周囲が明るく開け、明日起きるのが楽しみになりました。『論語』は人としてどうあるべきか大切な事ばかりです。人生は悩み多く否定的な思いを持つこともあります。失敗もあります。

東郷先生は忠恕と仁の心を明解に話され、笑いながら聞いて納得できたのです。そして反省を繰り返す事をよく話されます。己を尽くすは忠という。人の喜ぶ事に心を遣うは恕。誠心誠意相手を思うは忠恕だと。「人の話は自分の概念や観念を押しつけず聞く。相手の立場に立って考えることができたか」と。自分を見つめる大切さ。

「学びて時に之を習う」とかく学んだことは実行する。日常生活に活かさなければと思っています。先生は熱意を持って話されます。

学習と朋友が大切であることは私でも理解できるようになりました。

先日、娘から「お母さんは聞く耳を持ってきたね」と言われました。一歩前進したのかも、と嬉しかったです。

東郷先生の情熱に少しでも近付けるように、経験を通し広い視野で、残りの人生、論語の教え、ご法話、写経を心の支えとして参ります。私に老いる暇はありません。善光寺様、東郷先

生、今後ともご指導下さいますようお願いいたします。

合掌

▽吉羽ふじ子さん

「論語」に学ぶ

善光寺の方丈さんからご依頼いただいて、筆をとらせていただきました。

東郷先生の熱弁とユーモアのあるお話にどんどんと論語の世界へと引き込まれてしまいました。素晴らしい技術や科学が発達した文明社会の現在でも、二千五百八十年も前の思想家孔子の「精神と心」はいまにも息づいていて、真に迫り、様々な事柄を解明していくのです。

豊かに生きる人生の知恵を与えてくれるのです。一例として自分でまとめました。

学習とは、学んだことを機会あるごとに実行する。

あたかも、ひなが羽の白い間にバタバタと巣立ちの練習を重ね、やがて大空に飛んでゆくが如く。

←

くり返し、習熟体得し人間として成長する。

←

そんな自分の存在があれば友もでき、私もよろこびに遇することができる。

それこそ**「学習」**の効果だと教えていただきました。

子曰く
学びて時にこれを習う
またよろこばしからずや
朋、遠方より来たる有り
また楽しからずや

人しらずしていきどおらず
また君子ならずや

論語では、このように美しい詩で述べて下さっています。

最後の一行は相手が自分を認めてくれなかったり、理解してくれなくても相手を怨んだり、責めず、憎まないのが立派な人であると言っています。どうすればこんな境地に至れるのかわかりません。しかし、教えられる方向に自分を進めたいのです。私には目標があります。

目標に向かって一生懸命やりとげ、幾つもの山を乗り越え、快感と自信につないで参ります。きっと、自分を強くすると何か先が見えてきます。

「恕の心」とは、真心を持って相手の立場に立ち、やさしさと思いやりで尽くし、また自分がしてもらいたくない事は慎むということです。

孔子の仁、釈迦の慈悲、キリストの愛、ソクラテスの義、すべて神、聖人、仏、哲人様は共通した「恕心」の持ち方を教えて下さっているのも発見でした。心がわかれば難しくないということも大発見です。それぞれ畏敬を感じながら従ってゆきたいと願っています。

聖徳太子の十七条の憲法**「和を以て貴しとなす」**の名言も論語からだと知って目からウロコです。和だけではうまくいかない、礼（秩序）が加わって節度が保たれる。江戸時代、幕府を支えた教育、学問などが我が国に深く根付いていったということを論語を学んで知ることができました。

書きたいことは山ほどありますが、いろいろ心がけ生活するように努力していきたいと念じています。

そして一歩前に出て挨拶、返事、あと始末を尽くし、自分を力強くして参ります。

さあ、皆様、「論語」の世界に誘われて学び、磨き、自分を見つめ直してみましょう。先生のお話は格別です。とにかくためになります。笑いこけ、面白いです。楽しいです。時間はあっという間に飛んでしまいます。先生は、「過去と他人は変えられない。しかし、未来と自分は変えられる」と言われます。私もわかりかけてきました。

《今後の予定》平成二十七年

▽一月十二日（月）	▽七　月　五日（日）
▽二月　八日（日）	▽八　月はお休み
▽三月　八日（日）	▽九　月十三日（日）
▽四月十二日（日）	▽十　月十二日（月）
▽五月　十日（日）	▽十一月　八日（日）
▽六月十四日（日）	▽十二月十三日（日）

毎月一回、三時から四時（一時間）

善光寺霊園ニュース

横浜やすらぎの郷霊園

◇やすらぎの塔

～願はくは はなの下にて 春死なむ
そのきさらぎの 望月のころ～
（西行）

霊園管理事務所から墓域に登る河津桜の間に「やすらぎの塔」を建立いたしました。

「やすらぎの塔」はお遺骨を大自然に還す合祀塔です。

昨今はお墓の形態も多様化してきております。マスコミでもお墓について取り上げられることが多くなりました。樹木葬や海洋散骨、宇宙に飛ばす……宇宙葬もあるようです。善光寺で直接管理をしている、横浜やすらぎの郷霊園も十五年前の開園当初より、多くの相談を承って参りました。中でも墓地継承について悩まれる方が多く、その対応として永代供養墓「やすらぎの碑」を建立致しました。

永代供養墓「やすらぎの碑」では、地下に納骨室を設け骨壺のままお遺骨をご安置しております。

骨壺でのご安置期間の違いで、合葬（がっそう）と合祀（ごうし）の二つのタイプがあり、その期間は合葬で三十二年間（三十三回忌まで）。合祀で十年間となります。骨壺のままご安置する期間を経過した方々を土にお戻し、永遠のやすらぎの場として、

その御霊をお祀り出来るよう誓願し建立されました施設が、「やすらぎの塔」です。

塔の下には深く、広いカロートがあり、長期間にわたって多くの御霊をご供養させて頂きます。

永代供養墓「やすらぎの碑」からの合祀だけでなく、一般の墓地からの合祀も承ります。

また、善光寺檀信徒の皆さまで、墓地についてお悩みの方、お遺骨を自然に還したいと思っている方や他墓地からの改葬を希望されている方、管理料不要の善光寺永代供養墓・やすらぎの碑・やすらぎの塔をご検討下さい。詳しくは管理事務所までお問合せ下さい。

241-0802
横浜市旭区上川井町1749－1
横浜やすらぎの郷霊園管理事務所
TEL ○四五－九二四－○二一○

◇善光寺永代供養墓◇

～やすらぎの碑・やすらぎの塔～

1、合葬（がっそう）　※やすらぎの碑に埋葬。

単独型　永代供養料　五〇万円

夫婦型　永代供養料　八〇万円

三十二年間骨壷にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

2、合祀（ごうし）　※やすらぎの碑に埋葬。

一　霊　永代供養料　三〇万円

十年間骨壷にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

3、合祀2　※やすらぎの塔に直接合祀。

一　霊　永代供養料　二〇万円

合同合祀供養祭にて合祀

○ご希望の方には石版に一名づつ墓誌を彫刻致します。（有料・二万円）

○他霊園からの改装など複数名の契約（三霊以上）については金額のご相談も承ります。

○生前申込も受け付けております。

○詳細はやすらぎの郷霊園管理事務所までお問い合わせください。

◇やすらぎ通信

やすらぎの郷霊園では、年四回『やすらぎ通信』を発行しています。霊園からのお知らせや、善光寺の行事紹介などその時々の話題を掲載しています。クロスワードも掲載しました。挑戦してみて下さい。

きょう彼岸(ひがん) 菩提(ぼだい)の種(たね)を 蒔(ま)く日(ひ)かな

たね

種子さえ蒔いておけば
いつかかならず芽が出る
よいたねにはよい芽が
悪い種子には悪い芽が
忘れたころに
ちゃんと出てくる

《詩集『雨の日には雨のなかを風の日には風のなかを』より》

相田みつをさんの詩に『たね』という詩があります。

仏教では因果を説き、ご縁を大切にします。因果とは原因と結果。その間には様々な条件が存在します。それを私たちはご縁といいます。ある一粒の種。その種を土に蒔き、陽にあて、水をやる。やがて芽が出てすくすく育ち、花を咲かせます。種がある花が咲く。

お釈迦さまは、

比(こ)れあるが故(ゆえ)に彼(かれ)あり、
此れ起こるが故に彼起こる。
此れ無きが故に彼無く、
此れ滅するが故に彼滅す。

と示され、すべてがつながった存在であると説

かれます。

これとかれ（因と果）との間にある条件が縁。太陽や水や土。これらがご縁。目に見える縁、見えない縁。縁は意識するしないにかかわらず、私たちをつなげています。それはあたかも縦横無尽に張り巡らされた糸が一枚の布を織り上げるように、様々な縁が私たちをかたち創ってくれているのではないでしょうか。時の流れに沿う『縦の糸』。今をつながる『横の糸』。

頂いているご縁、その元になる種の部分（因）にしっかり心を向けることを恩と言います。（因に心で恩）。あなたの恩人は誰ですか？　今日まで自分を育んでくれたすべてのご縁に感謝。環境も条件。ご縁です。環境によって人は変わる。

道元禅師は『霧の中を行けば、覚えざるに衣しめる』また、『よき人に近づけば、覚えざるによき人となる』（『正法眼蔵随聞記』）ともいわれ、自覚の有無ではなく、自然と身につくものがあると示されています。

子は親の背中を見て育つとも言われますね。出来れば恵まれたご縁の中で歩いていきたいものです。

しかし時として自分では選びようのない環境、逆風の時もあります。

向かい風、逆境に逆らいながら、その中でもしっかりと種を植えて地に根を張っていく生き方をしていつか美しい花を咲かせよう。

ＮＨＫの震災支援プロジェクトのテーマソングは『花は咲く』ですよね。

（『やすらぎ通信』31号）

〈やすらぎ通信　一口コラムより〉

もらっても、あげても嬉しい、お年玉

子供の頃お正月の楽しみといえば、お年玉。

お正月の由来は、新年の神様である『正月さま・年神さま』を家にお迎えする行事にあるといわれます。正月さまが今年一年の生きる力『御魂（みたま）』を授けに各家にやってくる。お正月になると一つ年齢を足す『数え歳』もこの教えからきているのでしょう。

誕生日がきて歳が増える満年齢ではなく、お正月になると皆一斉に年齢が一つ増える『数え歳』。

正月さまが家にくる目印が門松、そして家の中の依り代が鏡餅といわれます。そして正月さまの御魂をお雑煮などにして食べることでその力を頂く。また家の主人が家族にこの餅を配ることが『お年玉（魂）』をあげる由来とも言われます。その慣習がお餅からお金や品物になったようです。

お年玉をもらって喜ぶのが子供。
その喜ぶ姿を見て喜べるのが大人。

もらうだけでなく、他人に何かを与えることで、その人が喜ぶ姿を見て共に喜べる心。与える喜びを感じることが出来たらいいですね。

お子さんだったら、例えばお手伝いをしたら大人の人が喜んでくれる姿に喜ぶ心。難しく考えなくても当たり前のように行っている挨拶や笑顔を与えるだけでも周りの人はきっと喜んでくれていますよ。

「喜びが喜びを連れてくる」そんな一年でありますように。

（『やすらぎ通信』32号）

春になる！

小学生の問題です。

氷がとけると何になるでしょう？

水は0℃で氷になり、一〇〇℃で水蒸気になる。だから正解は……水ですよね。

でもこの問題に、ある生徒が『春になる』と答えたそうです。降り積もった雪が氷になる雪国の子供でしょうか。確かに、暖かくなり氷が解けると春がやってきます。素直でやわらかい発想だと感心してしまいました。

春になり暖かくなると、冬の間枯木のように葉を落としていた桜の木々も一斉に花を咲かせます。

『鳥鳴き、花咲う（笑う）』。きれいな花を観て微笑むことが出来る。幸せを感じることが出来る季節、春がもうそこまで来ています。

水は温度に依ってそのかたちを変え、草木は気温に依ってその姿を変えていきます。私たち人間は何に依って変わって行くのでしょうか。

冬から春になり暖かくなると気分も陽気になりますが、春になって花が咲いてもきれいだと思えない、なんとなくつまらない、そんな時もありますよね。そんな時は、きっと氷のように心も固まっている時期なのかも知れませんね。何かに執着し自分自身で心を固くしてしまって、周りが見えない時期。でも何か一つのきっかけで人の心は変わります。

そのきっかけは何か？どこにあるのか？

その答えは案外近くにあるかもしれません。脚下照顧（きゃっかしょうこ）という言葉がやすらぎの郷事務所内に置いてあります。足下を照らし顧みる。今、ここを大切にして、よい縁

に気づくこと。そして春らしい暖かさで人と接することができたら素敵ですね。ひとそれぞれの花をいつまでも笑顔で咲かせ続けることができますように。

「見るところ花にあらずということなし。
思うところ句にならざることなし。」
（松尾芭蕉）

（『やすらぎ通信』33号）

今年もお盆の季節が巡って参ります

お盆のお経をあげにご自宅にお伺いする棚経。短い時間ではありますが、心に残るお話を頂戴することもあります。

年老いた母親を見送り、初盆を迎えたある女性のお宅でのお話。

「厳しい母でしたが、亡くなられて何が寂しいかというと、夕方、夕食の味付けを教えてもらうことが出来なくなってしまった事。今でも味噌汁を作っているとき、ちょっと味見してみてくれる？　なんて言ってしまう事があるんですよ」と語られました。

日常のほんのちょっとした事で感じる寂しさ。

作家の城山三郎さんは奥様に先立たれた後に、「そうか、君はいないのか……」と、ふとした時に思うものだと語られております。

同じく奥様に先立たれたあるお坊さんは、「若い時は、『おーいお茶！』と言っていばっていたけれど、今は『おーいお茶。入ったぞ！』と仏壇にお供えしているんだ」と教えてくれました。

また、幼い孫と遊んでいる時に急に涙がこみ上げてきて「君にも見せたかったなぁと……。」何気ない毎日の生活の中、ほんの些細な事が心にぐっと響く事があるんだよと話される笑顔の奥に人生の深みを垣間見た気がしました。

お盆には帰ってくる。待つ人の心の中にいろいろな想い出と共に。

今年もお盆の季節が巡って参ります。

（『やすらぎ通信』34号）

『くち』から出るもの、入るもの

《口から入るもので、
体を傷つけることがあり
口から出るもので、
心を傷つけることがある。》

口から入れるもの。つまり食べ物です。食べ物は栄養となり私たちの身体を作り、またエネルギーの源となり、細胞の代謝を助けます。

栄は「さかえる」こと。養は「やしなう」こと。食べることは、身体を元気に健康に保つために必要不可欠です。でもこの食べ物が身体を悪くする事もあります。食べすぎ、飲みすぎはもちろんの事、片寄った食生活も体を壊す原因となります。

昨今流行の本では、「これを食べたらだめだ」とか、「これが体によい」とか、色々な情報が溢れています。でも昔からの智慧を学び、旬の食材を好き嫌いなく食べることも大切ですね。腹八分目に医者いらず。「食欲の秋」でもバランスのよい食事を心がけたいものです。

口から出るもの。それは言葉。『口は災いのもと』ということわざがありますが、言わなく

ても良いのについ調子にのってつい一言、口にしてしまい気まずい雰囲気に……。そんな経験誰でも一度はありますよね。言葉は相手を傷つけると同時に言った本人も傷つけます。

会話にもスピード・テンポが求められるこの頃ですが、頭に浮かんだ事をすぐ言葉にするのではなく、ひと呼吸おいて会話しても良いのでは……。

くちから入れるもの、出るもの。どちらも毎日の生活で大切なものです。

身体や心を傷つけることのないように少し気をつけて、毎日を快適に過ごしたいですね。

（『やすらぎ通信』35号）

■クロスワードパズル

〈「やすらぎ通信」31号〉

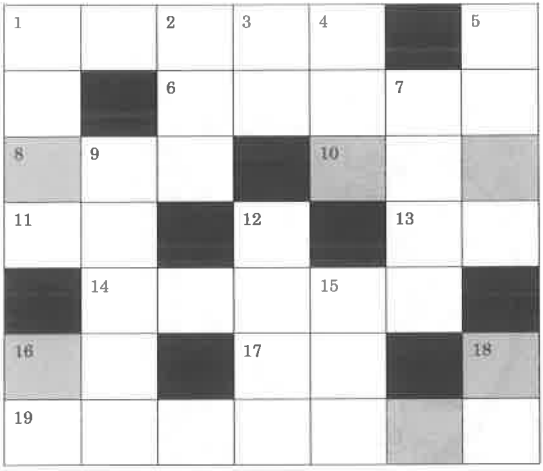
☆グレーのマスの文字を組み合わせて
言葉を作ってみて下さい。

【タテのカギ】

1 仏・法・僧の事。聖徳太子は篤くこれを敬えと言われました。
2 性格のこと。
3 これの無い世界を目指します。
4 仏壇にお祀りします。
5 二年ごと
7 生前を偲び、悼みます。
9 罪を悔い、仏前に許しを請う作法の際唱える言葉。
12 腕につけるサポーターの一種。
15 銀行に預けたお金
16 最近は忙しく○○多端な日々です。
18 ヒマラヤの山　８１６７ｍ！　○○ラギリ

【ヨコのカギ】

1 仏・法・僧に帰依します。
6 仏教でいうこの世の苦しみ。
8 悟りを求めて修行する。観音様や地蔵様。
10 フェイスブックでよく見ます。
11 これを味方につけると強いですね。
13 仏教でいう煩悩、三毒の一つ。○○・ジン・チ。
14 西遊記で有名な三蔵法師、般若心経も漢訳しました。
16 魚を入れる網。
17 ＮＨＫ朝の連続ドラマ『あまちゃん』の主人公　天野○○。
19 日本書紀。建国の天皇。



今日彼岸
□□□□□□を蒔く日かな

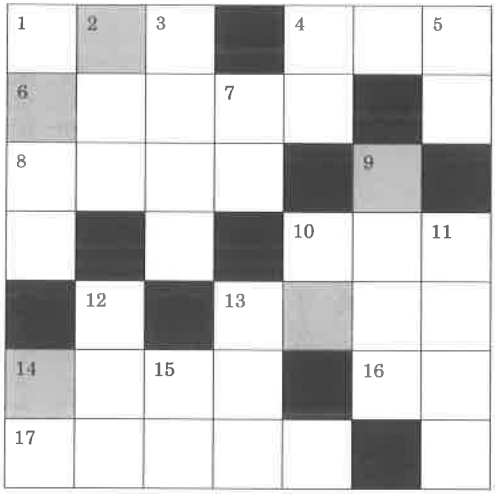
〈「やすらぎ通信」33号〉

【タテのカギ】

1　春の初め、新春。
2　辛子あえがおいしい春の味。
3　働く車、コンクリート○○○○車。
4　○○一輪、一輪ほどの暖かさ。
5　季節をあらわす言葉。
7　『加減乗除』の減は○○算。
9　お餅は○○○○がいい食べ物ですね。
10　乾燥剤、○○カゲル。
11　奈良から和歌山に流れる川、別名吉野川。
12　一つのことに打ち込む、ひたむきなさま。
13　お風呂に入る前にはこれをしましょう。
14　今回のクイズの出来は、○○上出来かな？
15　八幡神社の総本宮、大分にある○○神宮。
16　アベノミクスで下げ止まり　上昇のきざし？
17　神事に使われる弓　万葉集では枕詞

【ヨコのカギ】

1　桜の開花が楽しみです。
4　三月は弥生。四月は？
6　浜松市にある史跡。○○○○○観音（塚）。
8　根室地方の名産。○○○○カニ。
10　皮をはぎ、削ったままの木。
13　他人のもの。大切に扱いましょう。
14　子供や孫の写真の人も多いのでは？



4月8日は□□□□□
お釈迦様の誕生日

（答えは、105ページ）

◇やすらぎ寺子屋　～ほとけに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、毎月一回週末に「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

お釈迦さまや祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始め、来年は五年目に入ります。

《内　容》

○椅子坐禅

調身　姿勢を調える

調息　呼吸を調える

調心　心を調える

緊張しないで楽に呼吸がしやすい姿勢を探して座って下さい。

無理せず骨盤を起こし脊柱のカーブも意識してバランスとり、深い呼吸、腹式呼吸で息を長く吐いて下さい。

浮かんでくる想いに心を乱されないよう連想、物想いにふけることないよう、姿勢と呼吸に意識を戻して、今を感じて下さい。

気持ちがすっきりとしますよ。。

○法　話～お経に親しむ～

「お経に親しむ」と題し、善光寺経本をテキストに『開経偈』から毎月レジュメをお配りして学び始めました。一年かけて『般若心経』が終了し、続いて『修証義』を一節ずつ扱っています。

来年は、第四章の「発願利生」からです。言葉の解説だけでなく、その背景や行間を感じていただけるように共に勉強していきたいと思います。

○茶話会にて

お経の勉強の後には、その時々話題になったニュースや歌などを紹介しながらお茶をいただいています。たとえば、新聞の切抜きから…。

『読売新聞』編集後記より

◆めしべとおしべだけでは受粉できない。風や虫が仲立ちをする。先日八十七歳で亡くなった吉野弘さんに『生命は』という詩がある◆〈生命は／その中に欠如を抱き／それを他者から満たしてもらうのだ〉（詩集『贈るうた』）。草花に限るまい。人の一生にも、受粉を助けてくれる風や虫がいる。その人には、愛らしい少女が〝風〟であったらしい◆若手ダンサーの登竜門、ローザンヌ国際バレエコンクールで長野県松本市の高校二年生・二山治雄さん（十七）が優勝した。七歳でバレエを始めたきっかけは「好きな女の子がやっていたから」という◆風は受粉を手伝おうと吹くのではない。二山さんとバレエを結びつけた少女もたぶん今、自分が大輪の花を咲かせる手伝いをしたことに気づいていないだろう。えにしの糸の不思議さよ◆吉野さんの詩は結ばれている。〈私も　あるとき／誰かのための虻だったろう／あなたも　あるとき／私のための風だったかもしれない〉。愛らしかった時期こそないが、小欄が知らず知らず受粉を手伝った花も、どこかに咲いているのだろう。根拠のない想像に、ちょっと胸を張る。

〈平成26年2月4日付〉

生命のつながり、ご縁や般若心経の空のイメージを語り合いました。

生命は

生命は

吉野　弘

自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
花も
めしべとおしべが揃っているだけでは
不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする
生命は
その中に欠如を抱き
それを他者から満たしてもらうのだ

世界は多分
他者の総和
しかし
互いに
欠如を満たすなどとは
知りもせず
知らされもせず
ばらまかれている者同士
無関心でいられる間柄
ときに
うとましく思うことさえも許されている間柄
そのように

世界がゆるやかに構成されているのは
なぜ？

花が咲いている
すぐ近くまで
虻の姿をした他者が
光をまとって飛んできている
私も　あるとき
誰かのための虻だったろう

あなたも　あるとき
私のための風だったかもしれない

〈詩集『北入曾（きたいりそ）』より〉

新聞の切り抜きをもう一つ……。

『読売新聞』編集手帳より（抜粋）

◆月刊誌「文芸春秋」の編集長などを務めた車谷弘さんが、作家の内田百閒に叱られた思い出を著書「わが俳句交遊記」に書いている。百閒に「お忙しいですか」と聞かれ、「忙しくて困

っています」と答えたときのことという◆「忙しいというのは、それは人に向かって尋ねるときの言葉ですよ。自分で自分を忙しいというのはバカです。一日二十四時間を自分で適当に処理できないで、どうしますか」と◆その説に従えば恥ずかしながら、一年のほとんどを「バカ」で通している。上に「大」の字がつくのはやはり、仕事が何かと立て込む年の瀬である（中略）◆そう言いつつ、差しあたって読む暇のないミステリー小説を求めて書店をうろつき、出かけもしない旅の行程を時刻表で調べている。忙しい時ほど心がよそに遊ぶのはなぜだろう。「極めつきのバカだからです」と百閒先生の声が聞こえる。

〈平成20年12月24日付〉

誰でも経験があると思いますが、「忙しい時ほど、心がよそに遊ぶのはなぜだろう」。

心をよそに遊びにいかせないで、「今、ここ」に落ち着かせる。それが禅だと思うのですが、どうでしょう。なかなか出来ませんが、坐禅して少しでも「バカ」から抜け出すことができたらなぁ……。

《やすらぎ寺子屋　平成二十七年　上半期の予定》

第四十四回　一月　十日（土）
第四十五回　二月　一日（日）
第四十六回　三月　一日（日）
第四十七回　四月十一日（土）
第四十八回　五月　九日（土）
第四十九回　六月　七日（日）

○椅子座禅（約40分）
○読　経（約5分）　般若心経
○法　話（約15分）『修証義』講座
・『修証義』第四章から一緒に学びましょう。
茶話会　ちょっとひと息

一斉法要のご報告

【平成二十五年】

盂蘭盆施食法会　六月二十八日、二十九日

法話　光真寺住職　黒田泰弘師

二日間にわたる盂蘭盆施食供養。初日は初盆供養。翌日は檀信徒の方々の供養を午前と午後に分けて二座をお勤めしました。

本寺光真寺住職の黒田泰弘師に二年続けてご法話いただきました。ご法話の最後にみんなで「有難うございます」と十回のお唱えさせて頂き、心あたたまるお話が、さらに胸に染み入るようでした。

ニュース・アラカルト

秋彼岸法会　九月二十日

法話　長泉寺住職　水庭浩章師

午前・午後あわせて六百名の方が、心に菩提の種を蒔きに参拝されました。

冒頭、善光寺留学僧育英会の第二十四回育英生・樋口星覚師より、檀信徒の皆様にお礼の挨拶がありました。師は現在ドイツに在住し坐禅堂を開くなど活躍されています。

ドイツでの布教の難しさを述べつつも、困った時には皆様の事を思い出し、応援してくれる人がいると思うと力が湧いてきますと、感謝の言葉を口にされました。

檀信徒の皆様の尊い浄財が若く有望な人材を育てて下さっています。心から心へ、皆様のご理解・ご協力に心より篤く深く感謝申し上げます。

水庭師の法話は34ページをご覧ください。

ニュース・アラカルト

水庭浩章師

樋口星覚師

【平成二十六年】

新年祈祷会　一月九日

法話　当山住職

昨年から始まった、善光寺講座『論語からのお話』に因み、今年の目標は学習ですと宣言。

子曰く、学びて時に之を習う、亦悦ばしからずや。朋、遠方自り来る有り、亦楽しからずや。人知らずして、慍らず、亦君子ならずや。

ニュース・アラカルト

節分追難法会　二月三日

善光寺総代　東郷敏氏

節分に因み暦の「二十四節季」。大自然の摂理、地球の自転や子午線・黄道や大円などについてユーモアを交えて説明して下さいました。

ご祈祷の後は恒例の豆まき。魁聖関らによる豆まきも今年で三年目。今年は特別に友綱部屋の力士衆による、ちゃんこ鍋も振舞われました。

「福はうち！」この一年皆さまに障りなく厄除け、招福ご多幸をご祈念致しました。

（写真は巻頭のグラフページをご覧下さい）

春彼岸法要　三月十九日

法話　観音寺住職　黒田法正師

四月に予定されている伊勢神宮参拝旅行に因み、ご自分の師匠である光真寺先代住職黒田俊雄老師と参拝した時のエピソードを話して下さいました。

神前、神様の前でも大きな声で般若心経を唱えられた師匠との想い出を語り、今度の参拝には「是非、一緒に『般若心経』をお唱えしましょう」と誘われていました。

続いて廻向の後にお唱えする「略三宝」についてのお話。皆さま一緒にひと際大きな声でお唱えをして法要が結ばれました。

十方三世一切仏
諸尊菩薩摩訶薩
摩訶般若波羅蜜

ニュース・アラカルト

震災義捐金の御礼

震災直後に皆さまからお寄せ頂いた東日本大震災被災者義捐金につきましては、曹洞宗ボランティア（SVA）を通して現地に寄付させて頂きました。

善光寺では継続しての支援を続けたいと思っております。その一環として先日、皆さまよりお納め頂きました「護持会費」の一部を今年も神奈川新聞厚生文化事業団を通し日本赤十字社へ寄付させて頂きました。

個人の支援も含め寺としての支援も継続して行って参りたいと思います。

ご報告と併せ、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

やすらぎの塔開眼式・合同合祀慰霊祭

横浜やすらぎの郷霊園内に合祀施設「やすらぎの塔」が建立され、去る五月十二日、住職導師の下、「やすらぎの塔」開眼式と、合同合祀慰霊祭が執り行われました。

合同合祀慰霊祭では、やすらぎの碑より安置期間の経過した御霊をやすらぎの塔へ埋葬致しました。縁故者や関係者ら二十名を越す参列の中、一時間半にわたり、ねんごろなるご供養が営まれました。

大きな供養塔の正面に「やすらぎの塔」と刻まれている文字は住職による揮毫。

桜の木々の間、やすらぎの塔と並び、やすらぎ観音さまが優しく微笑みかけて下さいます。

ニュース・アラカルト

常住院・加藤弘美様ご逝去

平成二十六年一月二日、博志方丈のご母堂倫子様のお姉さま、加藤弘美様がご逝去されました。

弘美様は福井県若狭郡三方、曹洞宗常在院に生まれ育ち、ご主人である今の御住職加藤誠一老師と共に永くお寺を護ってこられました。

善光寺の創成期にはよくお手伝い頂きました。とても面倒見のよい方でお寺の裏方はもちろんの事、子供の頃より住職兄弟六人、とてもお世話になりました。

衷心より心からご冥福をお祈り申し上げます。

ニュース・アラカルト

《追悼文》

ただ、ただありがとうございました。

黒田　博志

今年一月二日に伯母が他界いたしました。その伯母は母の姉です。母は福井県の三方の出身です。常在院という曹洞宗のお寺に二人姉妹の妹として生まれました。その伯母がご主人である今の住職さまと一緒にそのお寺を護っておりました。

伯母はとても面倒見のいい方でした。

私はご存知のように六人兄弟です。子どものころは夏休みになりますと、母に連れられて兄弟全員で母の実家に遊びに行っておりました。それが毎年楽しみで、一週間から十日間くらいお世話になっておりました。

午前中はお寺の本堂で宿題を伯母に教えてもらい、午後になると伯母にいろいろな所に遊びに連れていってもらいました。海に行ったり、

渓流釣りに行ったり、ショッピングに行ったりしました。私たち兄弟を我が子のように面倒を見てくれました。

私が成人し、永平寺での修行期間中、半年ほど吉峰寺というお寺に配属されました。このお寺は永平寺から車で三十分から四十分の所にありました。そこに配属されている時に、ある日突然伯母が励ましに来てくれました。

そのお寺は山の上に在り、険しい山道を登らなければ来ることのできない場所にありました。階段が二百段近くあるのではないかという大変厳しい山道で、そこを両手いっぱいに差し入れのお野菜や果物を持って上って来てくれたのでした。

本当に嬉しかったです。ありがたかったです。

これは伯母が、ただただ私のことを思ってしてくれたことなのです。

思っていても行動に移すことがなかなか出来ない事も多い中、伯母は、なんでもすぐに行動に移し、みなさんのお世話をしてこられました。福井訛りのイントネーションで少しせっかちに話すその言葉も、もう掛けてもらえないと思うととても寂しい気持ちで一杯になります。

十年前、師父が遷化した朝も、年の暮れで常在院も忙しいのに泊まり込みで面倒を見てくださり、とても心強く感じた事を思い出します。

「大変な事になったけど、みんなで助け合うから、ひろちゃん頑張ってなぁ」と、何度も励まして頂きました。

母とは話し方も性格もちがう伯母でしたが、寺族として住職を支え、寺を護るその信念の強さ、芯の通ったまっすぐな心は似ている姉妹だと感じます。

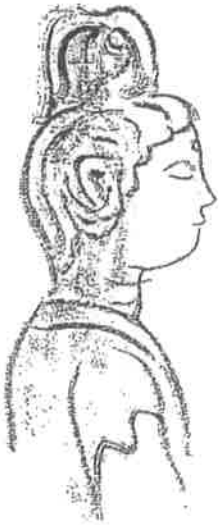
亡くなる前の年の三月に横浜に来られた際に、私の子供をみてくれた時が、最期のお別れとなってしまいました。

伯母を思い出すとき、とりとめのない思い出が胸にあふれますが、今はただ、ただありがとうございますと感謝の言葉があるのみです。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

ニュース・アラカルト



【クロスワードパズルの答え】

33号

1ハ	2ナ	3ミ	■	4ウ	ツ	5キ
6ツ	バ	キ	7ヒ	メ	■	ゴ
8ハ	ナ	サ	キ	■	9ハ	■
ル	■	ー	■	10シ	ラ	11キ
■	12イ	■	13カ	リ	モ	ノ
14マ	チ	15ウ	ケ	■	16チ	カ
17ア	ズ	サ	ユ	ミ	■	ワ

答え　ハナマツリ
（花まつり）

31号

1サ	ン	2キ	3カ	4イ	■	5カ
ン	■	6シ	ク	ハ	7ツ	ク
8ボ	9サ	ツ	■	10イ	イ	ネ
11ウ	ン	■	12ヒ	■	13ト	ン
■	14ゲ	ン	ジ	15ヨ	ウ	■
16タ	モ	■	17ア	キ	■	18タ
19ジ	ン	ム	テ	ン	ノ	ウ

答え　ボダイノタネ
（菩提の種）

坐禅会・写経会のお知らせ

加下さい。

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時からと、第四日曜日午後三時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、坐禅を二炷。そして、読経・法話。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方のご参加もお待ちしております。お気軽にご参

平成27年 善光寺坐禅会　年間予定表

■早朝参禅会　毎月第１日曜日　朝６時から

１月４日（日）	７月５日（日）	午前 5：45　集合 6：00～　坐禅・読経 7：30～　朝食（お粥） 8：15　解散
２月１日（〃）	８月２日（〃）	
３月１日（〃）	９月６日（〃）	
４月５日（〃）	10月４日（〃）	
５月３日（〃）	11月１日（〃）	
６月７日（〃）	12月６日（〃）	

早朝参禅会参加希望の方は、前日午後７時までにご連絡下さい。

■日曜坐禅会　毎月第４日曜日　午後３時から

１月25日（日）	７月26日（日）	午後 3：00～　準備・指導 3：20～　坐禅 4：00～　経行・小休 4：10～　坐禅 5：00　解散
２月22日（〃）	８月23日（〃）	
３月22日（〃）	９月27日（〃）	
４月26日（〃）	10月25日（〃）	
５月24日（〃）	11月22日（〃）	
６月28日（〃）	12月27日（〃）	

参禅希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

■水曜朝坐禅　毎週水曜日　午前７時から８時迄、坐禅と読経

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。
服装は、ゆったりとしたもの、靴下は履きません。
時計やアクセサリーは、はずして下さい。
※ 参加費はすべて無料です。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】毎月第四金曜日
　　午後二時より一時間半
【場所】善光寺不動殿
【読経】「般若心経」を全員で看読
【写経】引き続きお写経「般若心経」
【費用】無料
※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。
※参加の方は準備の都合上、ご連絡下さい。

平成27年

善光寺写経会年間予定表

1月23日（金）	7月24日（金）
2月27日（〃）	8月28日（〃）
3月27日（〃）	9月25日（〃）
4月24日（〃）	10月23日（〃）
5月22日（〃）	11月27日（〃）
6月はお休み	12月25日（〃）

午後
2：00～　読経「般若心経」
2：10～　写経
3：10～　読経
3：30　　解散

坐禅会・写経会ともに連絡先

善光寺　横浜市港南区日野中央一―十二―九
（〒二三四―〇〇五三）
電　話：〇四五―八四五―一三七一
ＦＡＸ：〇四五―八四六―二〇〇〇
Ｅメール：info@zenkouji.net
ＵＲＬ：http://zenkouji.net

華 道 教 室

今年から、新たに華道教室を開設いたします。

平成27年	1月27日（火）	7月28日（火）	毎月第4火曜日 午後2時～3時半
	2月24日（火）	8月25日（火）	
	3月24日（火）	※9月30日（水）	
	4月28日（火）	10月27日（火）	
	5月26日（火）	11月24日（火）	
	6月23日（火）	12月22日（火）	

【参加費無料】 お花代として、毎回 **¥1,000** ご準備ください。

指導：本多輝隆 先生

フラワーデコレーター協会本部講師

池坊正教授一級師範

華道教室「花塾」（港南区丸山台）

※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。

書 道 教 室

毎月第1・第3土曜日　午後1時～3時

【会費無料】（お手本代 ¥480 /月）

※参加ご希望の方は、ご連絡ください。

五世紀
中國敦煌
菩薩像

〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（LA 禅センター）
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A”
2．Zen Mountain Center of NewYork（NY 禅センター）
“Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A”
3．Zen-Zentrum Eisenbuch（アイゼンバッハ・禅センター）
“Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutchland Germany”
4．WatPaknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand”
5．理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成27年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1．論文（次項による）
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと　400字詰原稿用紙5枚以上（A4判タテ書き）
2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

〔募集人数〕

平成27年度若干名

平成26年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成27年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第28回生

横浜善光寺留学僧募集

平成27年度・2015

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

普門寺からのお便り

ヨーロッパ国際布教師
大悲山普門寺アイゼンブッフ禅センター
中川　正壽

■平成二十四（二〇一二）年十二月

拝啓　本年も押し迫りました。ご清祥にお過ごしのことと存じます。

ここ一年身辺いろいろありました。日本の御寺院とは異なり、法の後継者がいないこの普門寺では来年より私がお寺部門一人となって生活する分、これまで育ててきたサンガのメンバーを盛り立てて、毎回の禅のコース、境内の野菜畑など二、三人ずつを当てて担当することになっています。メンバー自身での討議実行試行錯誤となります。実際彼らがやらなければ人がいないのですから、みなもそろそろ来年からの新しい状況がわかってきたようで、よくなる方向は芽生えてきていますが、しかし私の舵取りが一番大切なところでしょう。その舵取りがまた私の一番苦手とするところでドイツ語習得と同じく見込みはありません。

グループが小さいものですから、私の人の良さでよきにつけ悪しきにつけ、こんな私から離れた者、いまだに信用してぴったりとついて来る者といろいろある中で、サンガができてからは一層まとまるようになっています。典座、堂行、維那と順番に受け持っています。全体としては普門寺は新しい展開を必要としています。スタッフの代わりにセミナーハウス経営担当者を入れ、給料を払います。もっともその給料をその人が稼ぐわけですが、そして専門にセミナー部門を経営してもらいます。

これまでにここに来る者を将来普門寺を支えることのできる人物にしたいと努力してきましたが、彼らの必要とするもの、また体力、気力、素質、性格、育ってきた家庭事情などのいろいろな要素があって、私の指導の下、本人たちは大いに充足を感じるようでしたが、私としては私一人ではこなしきれないジレンマを感じてきました。

ここに私の助手として先生格の者が二人ほどいればまた違うでしょうが、日常彼らのために時間・エネルギーのほとんどを費やし、これらの若者がこれから先八年、十年とかかって成長するかどうかを待つということになりますが、元々出家の志を立てたわけではない人たちなので、今後恋愛にしろ職場にしろ本人がその気になれば即刻出て行くというわけですから、私も六十六歳、この普門寺にいる私自身の五年先、十年先を考えて、今回長年の夢であった若いスタッフ三人を含む計四人の解散を宣言したことでした。

さてドイツは雪こそ少ないものの、夜は氷点下三度から八度ぐらいで日中も曇天の日が大半となります。私などには鬱陶しいことですが、それなりの味わいもあります。

この夏は普門寺単独主催邦楽コンサートを企画実行し、大変貴重な喜ばしい体験だった一方、こういうエンターテイメントの仕事の大変さを思い知らされました。日本から来られた御一行からは大変喜ばれ私どもに感謝されました。これも普門寺のスタッフの面々、サンガメンバーの協力、さらに通訳司会をしてくださった日本人女性や、その前にあったミュンヘンでの独日協会、日本人会共催の折りにボランティアでご協力いただいた方々と数限りない方々の奉仕によってできたことでした。詳しくはホームページをご覧下さい。

来年一月早々より三月八日まで修行としてここを離れております。また四月の二十六日は宮崎禅師の七回忌でありますので永平寺に参りますが、四月前半はここで二つのコースを務めなければなりませんので、残念ながら予定されている妙元寺様の法要には随喜できません。

どうぞよき新年をお迎えいただけますように祈念申し上げます。

合掌

中川正壽九拝

■平成二十五（二〇一三）年度報告

曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監部への年度報告

第一　普門寺における活動はプログラムの通り

第二　普門寺主催になる邦楽コンサートを七月トラウンシュタイン市にて開催。

第三　ミュンヘン参禅会「正法会」を指導

第四

・四月　プラハにて講演と二日の参禅会
　中部ドイツ、ホーフヘレンベルクにて禅の講演

・五月　永平寺本山に安居した北海道の伝法智道師が六月十九日まで当山にて研修

・六月　十八日より七月七日までサンガメンバーの円光、慈光の二人を東京永見寺様に袈裟把針習得のために派遣

・八月　ミュンヘン在住の庵下まゆみさんに御来山いただき、一日懐石料理を指導していただく

・十二月　二十六日より一月十一日まで本山派遣留学僧　壽山俊道師が当山にて研修

第五　五月と九月にミュンヘン・ウエストパルクのネパール・パゴーデにて禅の講演

第六　キリスト教系メディテーションセンター

としてドイツ随一の規模を誇るベネディクトゥスホーフにおいて十月十一日より十三日の間「スピリチュアリティと科学」のタイトルのもとに大がかりなシンポジウムが開催されたが、中川は参禅指導と三十分の講演を担当。講演者、参加者ともに大学関係者、医療関係者、哲学者、心理学者、心理治療家、禅の実践者が多かった。

本年は邦楽コンサートが普門寺主催による一大イベントであった。普門寺は本来日本伝統文化の紹介と支援も活動の一部としているので、四月二十八日の春祭りの折には、ミュンヘンに拠点を置く和太鼓グループ「黒竜太鼓」を招聘したが、コンサートは尺八奏者三人、長唄唄方三人、三味線方三人であり、三つの会場でコンサートを催し、普門寺が裏方一切をお世話した。滞りのない運びと大盛況に喜ばれ感謝されたが、日本への対応は中川一人で務めたので、禅センターとしてこうした催しを主催することの限界を感じた。

来年より待望の袈裟把針の「福田会」が発足する。過去幾たびとなく日本より来ていただいて指導を受けてきたが、その度ごとに習ったドイツ人が日本へ行くなどして定着しなかった。今度は普門寺近在のサンガメンバーが習ってきたので定着発展するだろう。

来年は特にサンガの自主性とそれなりの活躍が期待される。

以上

■EISENBUCH　アイゼンブッフ

「愛禅佛府」……アイゼンブッフ
「禅を愛する仏たちのすまい」

「府」には「貴人の邸宅。屋敷。住まい」の意味があります。

「愛禅」とは禅を愛する、つまり禅を行すること。

「佛」とは道元禅師の著書『正法眼蔵』の中の「行佛威儀」の巻に以下のごとく示されています。

※諸佛かならず威儀を行足す、これ行佛なり。

※佛向上の道に行履を通達せること、唯行佛のみなり。

※しるべし、生死は佛道の行履なり、生死は佛家の調度なり。

※了生達死の大道すでに豁達するに、ふるくよりの道取あり。

大聖は生死を心にまかす。この宗旨あらはる、古今の時にあらずといへども、行佛の威儀忽爾として行盡するなり。道環として生死身心の宗旨、すみやかに辨肯するなり。

さらに『正法眼蔵』「生死」の巻にはこのように教えられています。

※ただわが身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひやさずして、生死をはなれ、佛となる。

「愛禅佛府」における「佛」とはこの意味における「佛」であり、「行佛」です。その「仏たちのすまい」、つまり「道場」がこの「アイゼンブッフ」です。

育英会寄付者

■平成二十五年度（追記）

神奈川区　瀧澤孝子殿
江東区　西谷恒殿
旭区　半澤範之殿
南区　大森キクヱ殿
旭区　中村美代子殿
港南区　桂川正克殿
港南区　増山静江殿
沖縄県　佐渡山安慶殿
西多摩郡　宮田林産㈱殿
港南区　南有里殿
港南区　森佐二郎殿
港北区　瀧澤武雄殿

■平成二十六年度

港南区　森佐二郎殿
港南区　貞昌院殿
新宿区　吉田日光殿
磯子区　越石重博殿
港北区　瀧澤武雄殿
新宿区　東亜建設工業㈱殿
金沢区　太寧寺山本浄月殿
台東区　翠雲堂殿
川崎市　宮田富夫殿
港南区　鳥居秀行殿
磯子区　國廣敏郎殿
港南区　熊谷豊太郎殿
都筑区　阿部匡宏殿
町田市　鈴木幸雄殿

柏　市　伏　見　邦　弘殿
港南区　㈱せんざん山泉篤殿
茨木市　東雲寺　安井隆同殿
旭　区　沼　倉　みのる殿
長野県　正眼院　内山款偉殿
江東区　西　谷　榮殿
世田谷区　富　田　繁殿
西多摩郡　宮田林産㈱殿
港南区　桂　川　正　克殿
高槻市　東　郷　敏殿
富山県　浅　香　恵殿

ありがたいご寄付を賜り、
心より厚く御礼申し上げます。

これぞ仏祖の正法

石川県
大乗寺山主　東隆眞老師

拝啓　只今『成寿』四十三号拝受いたしました。

先代武志老師の誓願「宗祖を通して釈尊に還る」は実にすばらしい。これこそ仏祖正伝の正法を端的にあらわしたお話です。ほんとうにありがたい。

子を持って知る親の恩

福井県
興禅寺住職　木崎浩哉老師

『成寿』四十三号有り難く拝掌しました。厚く御礼申し上げます。仏道の実践と育英の利行等々美しく綴られた全頁を有益に楽しく読ませて頂きました。

就中、俊雄老師の御遷化はまことに痛惜の情にたえません。そして、第一子ご誕生の朗報は、最上の至福、心からお喜びを申し上げます。子を持って知る親の恩とか……さらなる孝順の願行と、ご法体

のご自愛を切にご祈念申し上げます。　合掌

教学の糧と……

京都市
清水寺貫主　森清範様

平素は当山に対し格別のご懇情を頂き　尚その上此度『成寿』第四十三巻を御恵贈下され誠に有難うございます

当山の貴重な蔵書として納め、教学の糧とさせて頂きたく寸書をもって御礼申し上げます　合掌

一層の興隆を御祈念

神奈川県
宮本延雄先生

このたび『成寿』を御恵贈賜り衷心より感謝いたします。

貴寺の一層の興隆を御祈念申し上げます。

六月、香風萬里

埼玉県
蓮光寺住職　今泉源由老師

拝啓　『成寿』拝受しました。

樹里ちゃんのご誕生おめでとうございます。六月十四日から開花した当山の蓮の花。今日は伊勢神宮蓮と唐招提寺蓮が咲きました。明朝には常陸蓮が笑いそうです。

善光寺様も樹里ちゃんを中心に香風萬里。ありがとうございます。皆様どうぞお元気で。

継続の難しさに敬意

福島県
円通寺住職　吉岡棟憲老師

『成寿』四十三号届けていただきありがとうございました。継続することの難しさを乗り越え発行を続けることに敬意を表し、益々中身が充実

していくことに賛意を送ります。

紙面から頂戴した数々の情報は私たちにとっても大変役立つものばかりですので今後の活動に使わせていただきます。ありがとうございました。

世界に発信

秋田県
松庵寺住職　渡邉紫山老師

拝復　『成寿』拝受　方丈様の自然体が何とも安心を与えてくださいます。

実母の葬儀には、有り難うございました。六月、一周忌を長野で済ませ、帰り道に足利の高福寺武井全補老師を訪ねました。本山送行以来の邂逅で、御本師様の著書を頂きました。哲應老漢は秋田の人。白純老師のお父様も秋田の鎧家でしたね。宗門の正統なお悟りが栃木で、横浜で、そして世界に発信されている様で、感激しています。

隅々まで拝読

長野県
石黒玄章師

冠省　この度も『成寿』をご恵贈頂き、厚く御礼申し上げます。さっそく隅々まで拝読させていただきました。檀信徒の皆さまと住職を中心として仏さまの御教えを実践しているお姿に小生も益々頑張らねばと思った次第です。今後ともよろしくお願いします。

又、第一子御誕生誠におめでとうございます。命のリレー。先代さまの願いと共に健やかなご成長お祈りしています。

合掌

支えられる日々に感謝

神奈川県
瀧澤武雄様

拝啓　雨上がりの青葉がひときわ鮮やかに感じられるこの頃でございます。旅行の折

には大変お世話になりました。楽しい素晴らしい旅でした。その上、思い出の写真をご送付頂き誠に有り難うございました。又、楽しかったひとときを思い出しております。

日頃善光寺様に支えられ日々健康でこのように旅行に参加出来ますことに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。末筆ながら善光寺様の御発展をお祈り申し上げます。

楽しい伊勢参拝でした

神奈川県
山越しづゑ様

拝啓　新緑の候　いつも大変お世話様になっております。又、先日は楽しい伊勢神宮参拝に御一緒させていただきましてありがとうございました。

豊川稲荷、伊勢神宮参拝とても有意義な一泊二日の旅でした。皆様の御心遣いに感謝申し上げます。又、記念写真を義妹の分までお送り下さいましてありがとうございました。

時節柄どうぞ皆様御自愛下さいませ。今後共よろしくお願い申し上げます。

再び坐禅会に参るのを楽しみに

神奈川県
山田和雄様

『成寿』四十三号拝受、有り難うございます。法話をはじめとして、内容豊富で大変勉強になります。小生、心臓バイパス手術後で療養中ですが、再び善光寺様の坐禅会に参るのを楽しみにしております。一層のご活躍をお祈り申し上げます。

先代様とのご縁を大事

東京都
磯村（早田）啓子様

『成寿』第四十三巻拝受いたしました。博志方丈様がご立派に先代様の事業を継承発展されているご様子が『成寿』に溢れておりました。

又、この度のお子様のご誕生も誠におめでとうございます。

私も先代方丈様とのご縁を大事に頑張っております。先に出版した拙著をお送りしましたが、届いていますでしょうか。六月はじめにはバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学で発表して参りました。どうぞ皆様ご健勝で。

育英生採用に感謝

東京都
向　慧様

横浜善光寺留学僧育英会の皆様

暑い日が続いてますが、皆様お元気でしょうか。先日確かに『成寿』を受け取りました。今年度の育英生に採用していただきまして、心から感謝しております。

現在の大学院の勉強状況を説明させていただきますと、六月二十六日に東洋大学大学院の発表会に参加しました。その前に三ヶ月間発表会の論文を準備して、いただきました奨学金をもとに研究内容に関する書籍を購入することができました。日本語の口頭表現はまだまだですが、私にとっていい経験になったと思います。

今は、更に発表した内容から読み深めて論文を修正し、来年の四月には学術誌に投稿したいと思っております。学術誌に採用された折には、ご連絡差し上げます。

まだまだ暑い日が続いていますが、ご自愛下さいませ。

うれしいプレゼント成寿

千葉県
藤田正子様

来る日も来る日も暑くうっとおしい今日この頃ですが、またまたうれしいプレゼントが私の元に届きました。『成寿』第四十三巻です。表紙はなつかしい我が師の故伊藤三喜庵先生の作品です。力強い作品は「がんばりなさいよ」と、私に言ってらっしゃるような気がいたします。

ご本の中には、うれしいお便りが一杯で、心あたたまる気持ちになります。又、黒田博志住職にお子様ご誕生のお知らせ、おめでとうございます。私もまだまだ皆様に習い、元気に生きてゆきたいと感じております。ありがとうございました。

平常心で手術に感謝

富山県
浅香恵様

樹里様のご誕生おめでとうございます。亡き武志大和尚さまも天国で喜んでおいでのことと存じます。

私は乳ガンになり、右乳房を四分の一切除しました。平常心で手術が受けられたのも『成寿』を読ませていただいているおかげだと思い、深く感謝しています。

これからもよろしくお願いします。かしこ

飾らぬご人徳のおかげ

神奈川県
國廣敏郎様

暑中お見舞い申し上げます。法要ごとに大変賑わっていて嬉しい限りです。方丈様の飾らぬご人徳のおかげです。

先日の先代墓開きに

風薫る
緑の丘や
師の墓標

真清浄寺　吉田日光師

冠省　南無妙法蓮華経

施本、ありがとうございます。浄仏国土建設の為に全国の僧侶立ち上がろう。

《癒し絵》

高島　豊様

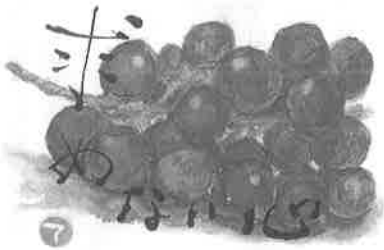
癒し絵で個展も開催されるなどご活躍。東日本大震災被災地でボランティアも行っておられます。

坐禅会、写経会など各行事に積極的に参加されています。

《絵手紙》

越石哲永様

善光寺留学僧育英会第三期生。脳梗塞を患うも善光寺講座「論語からのお話」に出席されるなど心身のリハビリに努めている。毎月、心のこもった絵手紙を送って下さってます。



編集後記

▼成寿四十四号お届け致します。今年は、各地で自然災害の多い年でした。二月には関東で二週続けての豪雪。八月には京都や兵庫での集中豪雨。広島の土砂災害、台風十九号の日本横断。御岳山の噴火…。当たり前のようにあると思う明日が当たり前でない現実を見せつけられ、自然への畏怖をまた新たに致しました。東日本大震災の復興もまだまだ。被災されました多くの方々へ心より御見舞い申し上げますと共に一日も早い復興を祈念致します。今年もお寺に寄せられた浄財の一部を寄附させて頂きました。

▼節分の豆まき。鳥居総代のお世話で友綱部屋の力士衆、魁聖関による豆まき。今年は特別にちゃんこなべの炊き出し。嬉しそうに召し上がる人々の笑顔にこちらもニッコリ。㈱板橋様による特設舞台やテントの設営、陰でご尽力頂いた後援会長はじめ多く方々のお力です。感謝申し上げます。

▼横浜やすらぎの郷霊園に合祀墓、『やすらぎの塔』を建立致しました。昨今お墓事情も様々ですが時代に流されず、寺として供養を中心にした霊園づくり。お墓にお悩みの方、ご相談下さい。

▼来年は大本山總持寺二祖峨山韶碩禅師六五〇回大遠忌です。善光寺でも団体での参拝を予定しています。（平成二十七年九月二十九日）詳細は後日ご通知申し上げますが、檀信徒各家のご先祖様のご供養と先代住職の供養もお勤めいただく予定です。

▼六年後の二〇二〇年には東京オリンピックが開催。巷では「それまでは長生きしたい。冥土の土産話にしたい」などの声もちらほら。健康寿命が延び元気の張り合いになるのなら何よりですネ。

▼先代住職の『茶禅一味』。「お・も・て・な・し」の精神。お茶の侘び、活き活きとした禅の心を説いて止まないそのお言葉を今一度皆さまと味わいたく再掲載させて頂きました。

▼会者定離。伊藤初枝元婦人会会長がご逝去されました。故伊藤喜三郎（三喜庵）先生の奥様。先代住職夫妻の仲人でもあり、善光寺の各行持や旅行にも度々参加して下さり公私共に大変お世話になりました。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

▼善光寺講座、お寺で論語を学ぶ。仏教と論語が解けあう世界。老若男女皆さまアッという間の一時間です。共に楽しみながら学びましょう。来年は坐禅会や写経会、書道教室。そして新しく華道教室も始めます。

▼健康寿命という言葉が流行っているそうです。元気に健康で生活ができる期間をいかに延ばすか。ウォーキングや〇〇体操などで身体を鍛え病気よ、バイバイ！　そして身体だけでなくお寺に足を運んで心も健康に。心やすらぐひと時を。ご法事の他にも各行持・催事へのご参加、またお気軽に御参詣下さいますよう、お待ちしております。

成寿　第四十四巻
平成二十六年十二月二十日発刊
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五（八四五）一三七一
ＦＡＸ〇四五（八四六）二〇〇〇
印刷所　㈱中外日報社

横浜善光寺